都城市文化財調査報告書

第　4　集

菓子野地下式横穴
KA SHI NO

築　池地下式横穴
CHIKU JI

1986

都城市教育委員会

序

都城市文化財調査報告書第４集をここに刊行いたします。
今回は、前回にひきつづき、「菓子野地下式横穴」　「築池（下水流町）地下式横穴」について、その発掘調査の結果を報告するものであります。

調査にあたっては、宮崎県教育委員会・県文化課のご指導と多大なご協力によって行なったものであり、特に発掘調査に際しては県文化課の永友良典氏・北郷泰道氏のご指導に負うところが大きく、深く謝意を表します。

また、発掘調査にご協力いただいた地主の　　をはじめ地元市民各位にも心からお礼を申し上げたいと存じます。

この調査報告書が当地方の歴史解明に活用され、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに文化財愛護思想の普及向上の一助となることを期待しまして序文とします。

昭和61年３月

都城市教育委員会
教　育　長　久味木 福 市

例　　言

1．本書は、都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．掲載しているのは、古墳時代関係3件についてである。

3．調査関係者は、次のとおりである。

調査主体

都城市教育委員会

	教育長	久味木福市
	図書館長（S．59年度）	鬼束　益本
	図書館長補佐（S．59．60年度）	永山　勝美
調査員	図書館・郷土館主事補	矢部喜多夫 （現、社会教育課主事）

調査指導

宮崎県教育庁文化課主任主事	永友　良典
宮崎県教育庁文化課主事	北郷　泰道

調査協力

宮崎県教育庁文化課主事	日高　孝治
宮崎県文化財保護指導委員	児玉　三郎
鹿児島大学法文学部学生	松下　昌弘
	坪根　伸也
	岩見　典子
	吉本　正典

4．人骨の調査は、鹿児島大学歯学部小片丘彦教授に依頼した。

5．本書の執筆，編集は矢部があたり、人骨篇は、鹿児島大学歯学部口腔解剖学第2教室小片丘彦氏の玉稿をいただいた。

6．本書で使用した方位は、すべて磁北である。

総　目　次

Ⅰ．菓子野地下式横穴調査報告……1
Ⅱ．築　池地下式横穴調査報告……29
Ⅲ．菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨……45
Ⅳ．付　　録……67

菓子野地下式横穴

例　　言

1．本報告は、都城市教育委員会が実施した都城市菓子野町に所在する菓子野地下式横穴第59－1号・2号・3号の発掘調査報告である。

2．発掘調査は、市立図書館郷土館主事補矢部喜多夫の担当で、昭和59年5月24日から6月3日まで実施した。人骨については、鹿児島大学歯学部解剖学第二教室、小片丘彦・川路則之・峯和治・山本美代子・岡元満子諸氏に依頼した。

3．本報告書に使用した図面の作図は、遺構を矢部、鹿児島大学学生で、人骨については、鹿児島大学解剖学第2教室が行った。

　遺物の作図，製図は矢部が行った。

4．出土遺物は、都城市教育委員会で保管している。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　調査の記録……3
(1)　調査の概要……3
(2)　第59－1号地下式横穴……5
(3)　第59－2号地下式横穴……9
(4)　第59－3号地下式横穴……11
Ⅳ　まとめ……14

挿図目次

第1図　遺跡所在図……2
第2図　地下式横穴分布図……4
第3図　第59－1号地下式横穴実測図……6
第4図　出土遺物　剣……7
第5図　出土遺物　鉄鏃、短剣……8
第6図　第59－2号地下式横穴実測図……10
第7図　第59－3号地下式横穴実測図……12
第8図　出土遺物　鉄鏃、錐……13

図版目次

図版１　(1)　遺跡遠景……19
(2)　遺跡近景……19
図版２　(1)　東側トレンチ……20
(2)　西側トレンチ……20
図版３　(1)　第59－２号地下式横穴……21
(2)　第59－３号地下式横穴……21
図版４　(1)　第59－１号竪坑及び閉塞状況……22
(2)　閉塞部拡大……22
図版５　(1)　第59－１－１号人骨（奥）……23
(2)　第59－１－２号人骨（手前）……23
図版６　１号　鹿角装剣，短剣，鉄鏃　出土状況……24
図版７　(1)　２号　竪坑……25
(2)　人骨出土状況（竪坑より）……25
図版８　第59―２―１号　人骨出土状況……26
図版９　(1)　３号　竪坑……27
(2)　玄室奥の突出部……27
図版10　出土遺物……28

Ⅰ、調査に至る経緯

昭和59年５月12日、土地所有者　　より耕作中に地面が陥没した旨の連絡があった。同日、現地へ赴き、陥没部分から東へ空間が広がっており、人骨を確認できたので、地下式横穴と判断した。つづいて５月16日付で同氏より遺跡発見届が、市教育委員会へ提出された。これに対し，県教育委員会より遺跡の取扱いについての通知がなされた。一方、　　氏より市教育委員会に発掘調査を行なってほしいとの連絡があり、同委員会では水田耕作のため現状保存が困難であると思料し、発掘調査を実施するに至った。

調査は、昭和59年５月24日より翌６月３日まで（10日間）行なった。陥没部西側に３×３m、その南側に２×20mのトレンチを入れ、３基の地下式横穴の竪坑部を発見した。この３基のうち２基の地下式横穴から都合３体の人骨が出土した。これらは、鹿児島大学歯学部口腔解剖学第２教室教授小片丘彦氏に調査を依頼した。

Ⅱ、遺跡の位置と環境

都城市菓子野町菓子野は、都城盆地の北西、霧島山系より尾根状に東へのびる台地の裾野に位置している。当地の南には、高千穂峰を源とする庄内川が東流し、裾野東端で、蛇行しながら北へ流れる大淀川に合流している。この庄内川から台地南端までは水田が広がっており、台地との比高差は約10m程である。この台地上には、県指定の円墳が点在していたが、現在消滅し水田となっている。この他、地下式横穴の存在も知られており、昭和55年に１基、昭和57年に５基が市道路拡幅工事等の際に発見され、発掘調査が実施されているところである。[注１)] [注２)]

今回調査された地下式横穴は、菓子野小学校より南へ約200m程の台地縁部で、県指定古墳（庄内古墳３号、消滅）・昭和57年に調査した第57－４，５号地下式横穴より北東約20m程に位置している。これで、菓子野地区での地下式横穴の発掘数は、合計９基を数えることとなった。

1．第59－1・2・3号　2．第57－4・5号　3．第57－1・2・3号　4．5・6・県指定庄内古墳（S．59 解除）　　都城市文化財報告書第3集より

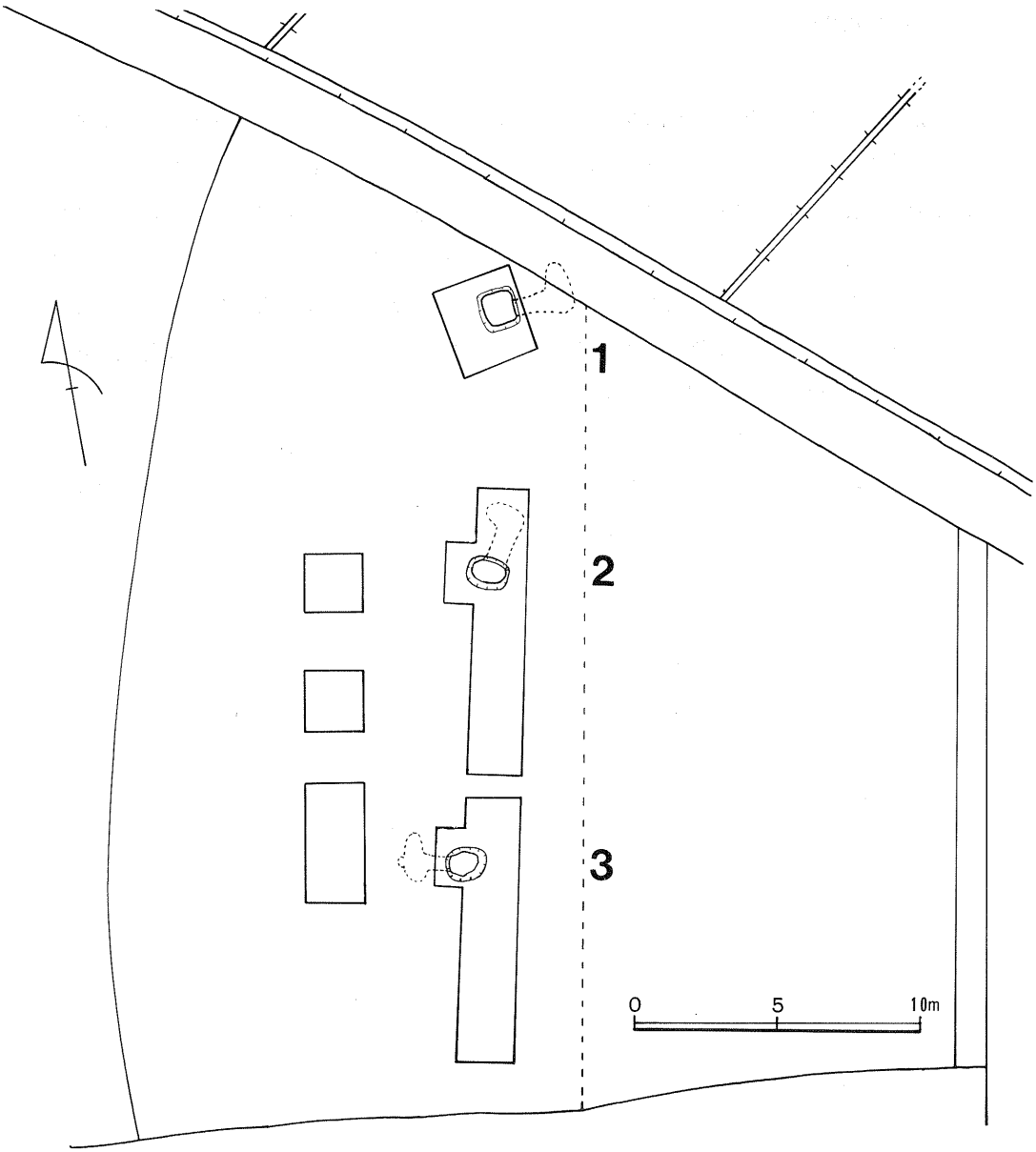
第1図　遺跡所在図

Ⅲ、調査の記録

(1)調査の概要

発見届のでた地下式横穴の陥没部は、羨門部に近い羨道上部であった。まず、竪坑を検出するために３×３ｍ程のトレンチを入れた。つづいて、その南側に２×20ｍ程のトレンチをほぼ南北に設け、さらにその西側に並行して３ケ所試堀を行なった。結果、新たに２基の地下式横穴が発見され、北より菓子野地下式横穴第59－１，２，３号と記する。３基の地下式横穴の主軸方位は、各々まちまちで、第１号は東，第２号は北北東，第３号は西にとっている。前回（昭和57年）発掘調査された第57－４，５号の主軸方位は、２基とも北北東を示しており、今回調査した第２号と同じ主軸方位である。

また、当地の基本層序は、第Ⅰ層耕作土，第Ⅱ層黄褐色土，第Ⅲ層黒褐色パミス混土，第Ⅳ層御池軽石層である。３基の玄室は第Ⅳ層に構築されており、１，２号は逆P字形（片袖形）で、第３号は両袖形の玄室の構造である。また、第１号地下式横穴は２体埋葬されており、奥壁側から第59－１－１号，同２号人骨とした。第２号地下式横穴は１体埋葬されており、これを第59－２－１号人骨とした。３号地下式では、羨道・玄室内に土砂の流入がはげしく、人骨片が若干確認できたのみだった。



1．第59－1号　2．第59－2号　3．第59－3号

第2図　地下式横穴分布図

(2) 第59－1号

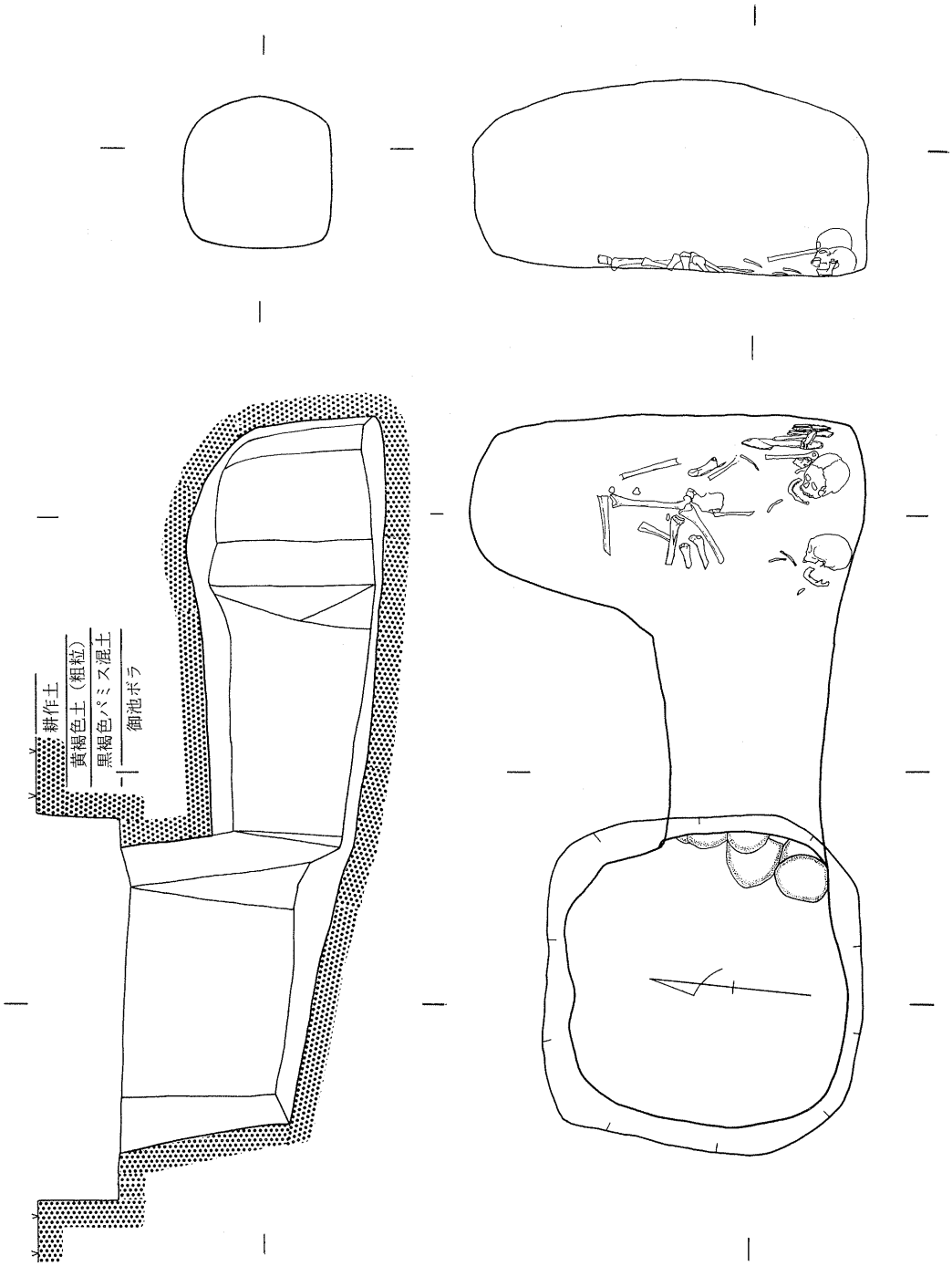
1．遺　構（第3図、図版4，5）

第59－1号地下式横穴は、羨門に近い羨道上部が陥没しており、玄室内の人骨が大部分土砂に覆われていた。遺構の主軸方位は、N85°Eで、竪坑をほぼ真西、玄室をほぼ真東方向とする左片袖（逆P字形）で、玄室は、御池軽石層内に構築されている。

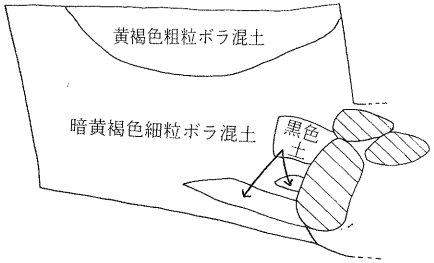
竪坑は、1辺が約130 cmの方形を呈し、深さは最浅部で約70cm，最深部で100 cmであり、羨道方向へゆるやかに傾斜している。羨門は、竪坑東壁の南半分側にあり、開口部は、人頭大の軽石7個が一段に積み上げられて、羨道内部を閉塞している。羨道はほぼ真東にのびる平入りの構造[注3]で長さ90cm、幅は羨門部で70cm、中央部付近で65cm、玄門部で80cmを測り、羨門から玄室の方向へ、約10°傾斜している。

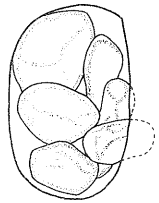
玄室は、北側の両隅が丸みをもっており、南から北へ先細りの形をした台形プランを呈し、極端に北にかたよる両袖形とも考えられるが、左片袖形とみなしてよいと思われる。
測定値は長辺70cm、短辺80cmで、天井の高さは、中央付近が最大で80cmである。天井は、ボラ層内のため明確ではないが、アーチ状をなしていたと思われる。

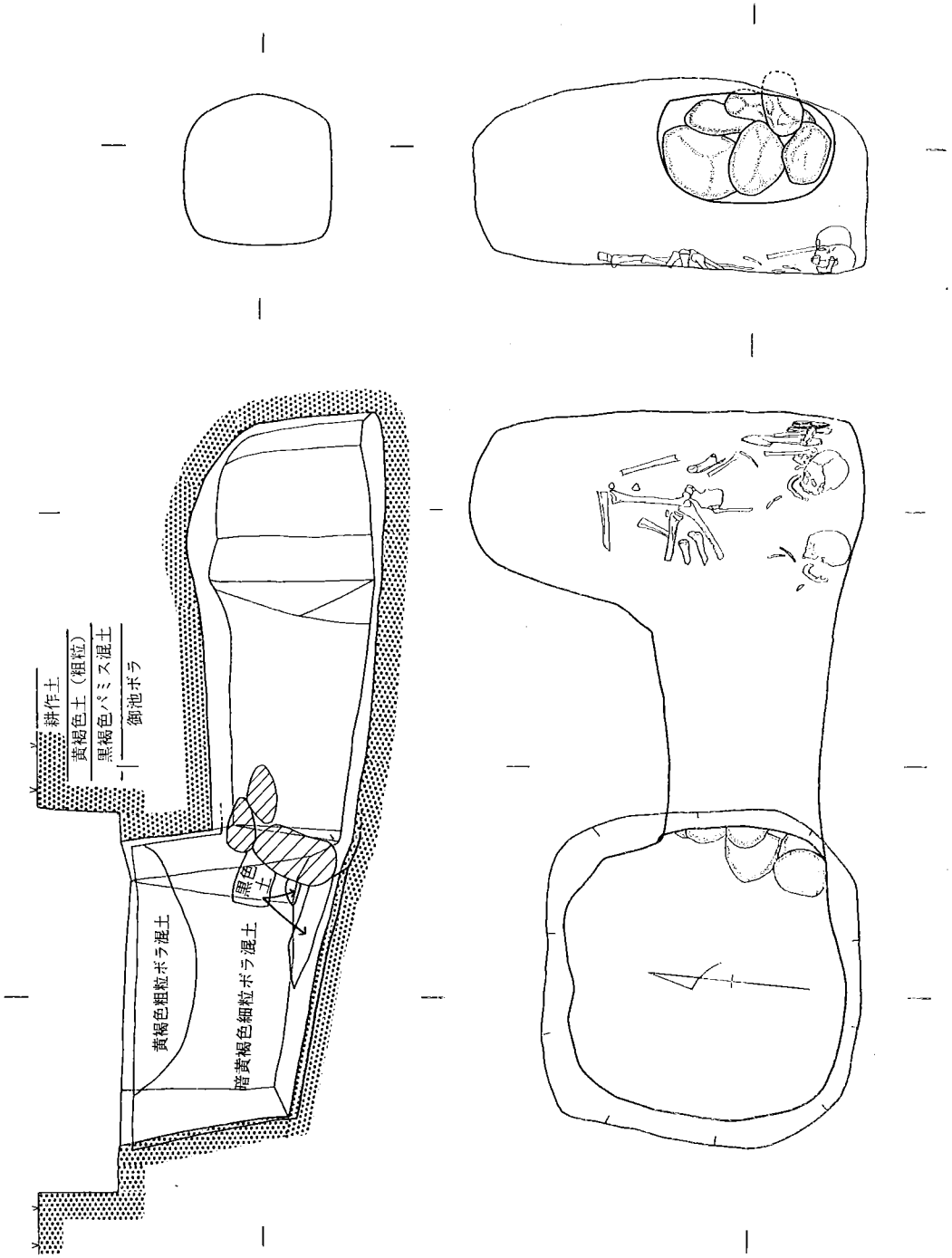
人骨は2体遺存し、頭位を南南東にとっており、1号人骨は壮年男性，2号人骨は熟年女性である。1，2号とも頭蓋骨は良好な状態であったが、胸部はごく1部しか残存していなかった。また、2体とも頭蓋骨に朱の付着がみられた。この他、1号人骨は、脚を伸した状態であるが、2号人骨は膝を立てた（曲げた）状態で出土している。遺物は、1号人骨の頭蓋骨東脇に添って、手前より鹿角装剣1振，鉄鏃6本，短剣1振が一塊になって出土している。



第３図　第５９－１号地下式横穴実測図


黄褐色粗粒ボラ混土
暗黄褐色細粒ボラ混土
黒色土





第3図　第59－1号地下式横穴実測図

0　1m

出土遺物

遺物は、1号人骨に向って左脇に、人骨に並行して、手前から鹿角装剣、鉄鏃6点、短剣が重なり合って、鹿角装剣が鋒先を北、短剣が南に、鉄鏃は矢先を南に向けて出土している。これらの鉄製品は、出土位置により1号人骨に伴うものと思われる。

剣（第4図　図版6・10）

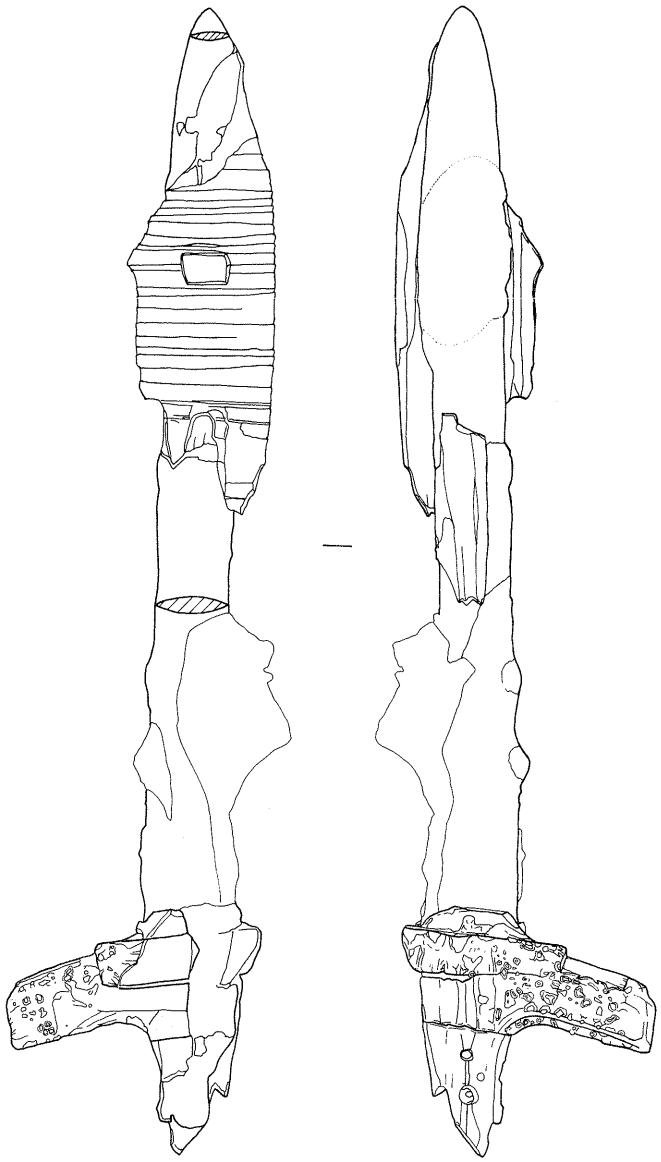
現存長38cm，身長29.9cm茎長7.3 cm，身幅は中程で2.4 cm，鋒先で1.3 cm程である。柄は、鹿角装で、目釘孔が1ケ所確認できる。柄頭が若干欠足している。鞘の木質が部分的に残存し鋒先から中程にかけては、木質に桜の皮が鋒先から巻きつけられている。

短剣（第5図　図版6・10）

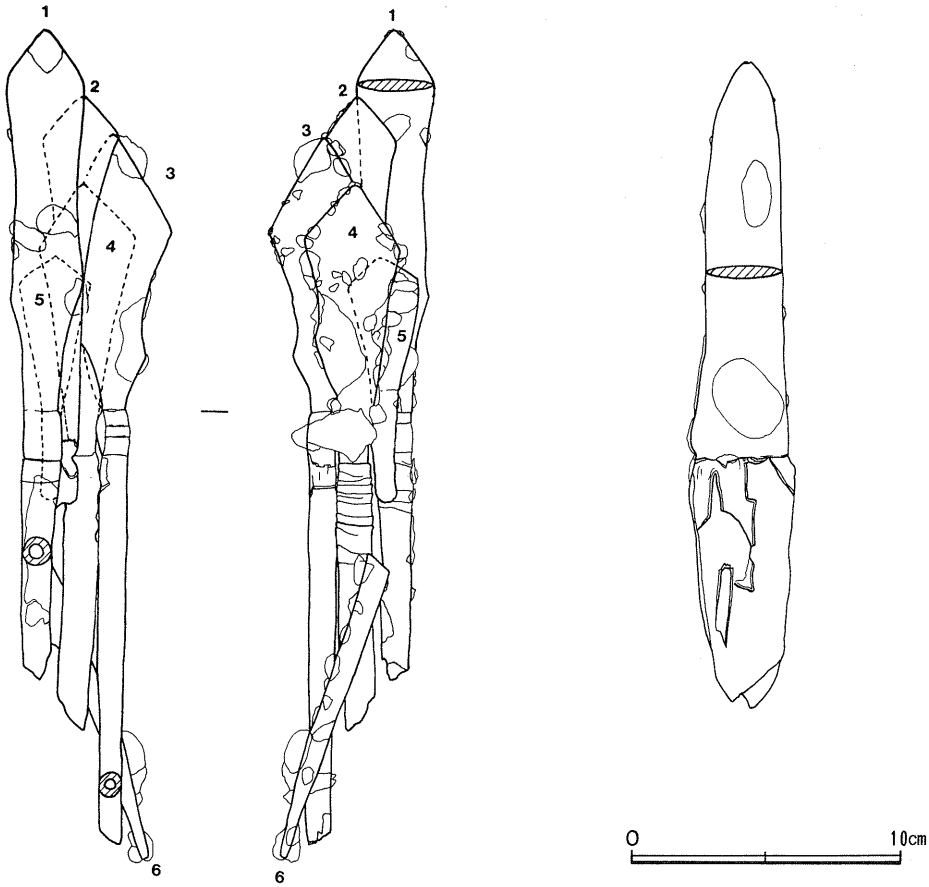
一番奥壁側に副葬されている。鋒先がほんの少し欠足しているがほぼ完形である。全長23.7cm，身長14.4cm，身幅は中程で2.9 cmを測る。柄は木質である。

鉄鏃（第5図　図版6・10）

両剣の間に副葬され、少し沈んだ状態で、6本が一塊となって出土した。平根鏃5本，片刃鏃1本と思われる。



第4図　出土遺物（剣）　0　10cm



単位（cm）

番　号	現　　長	矢柄部分までの長さ	身の最大巾	身の厚さ
1	23. 9	14. 1	2. 8	0. 5
2	15. 2	12. 7	2. 7	――
3	26. 1	10. 1	――	――
4	20. 1	10. 2	3. 4	――
5	9. 0	4. 9	2. 6	――
6	11. 7	――――	1. 0	――

第５図　出土遺物（鉄鏃・短剣）

(3) 第59－２号

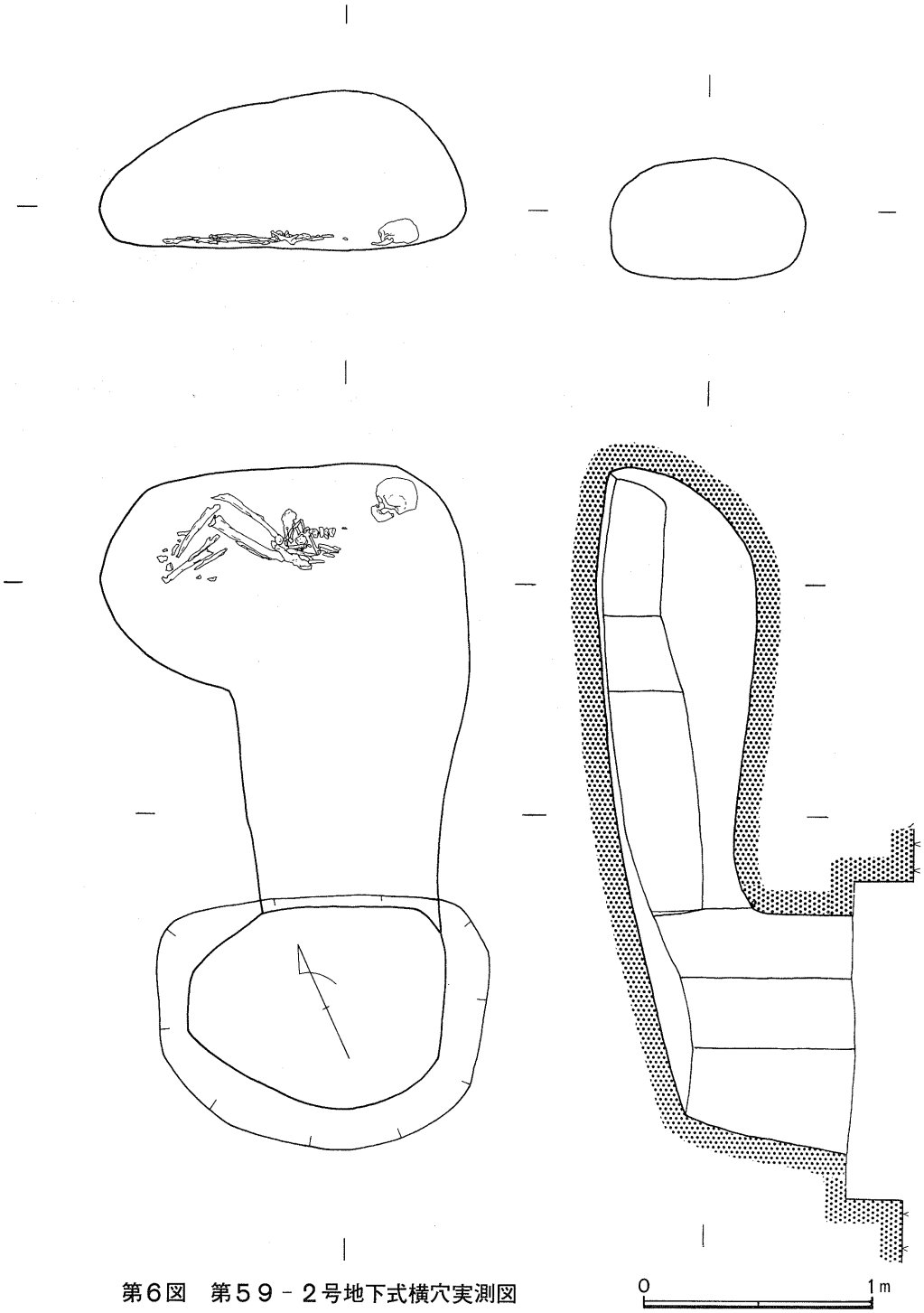
１．遺　構（第６図，図版７・８）

第59－２号は、主軸方位がN25°Eで、竪坑を南南西、玄室を北北東方向で、御池軽石層内に構築されている。

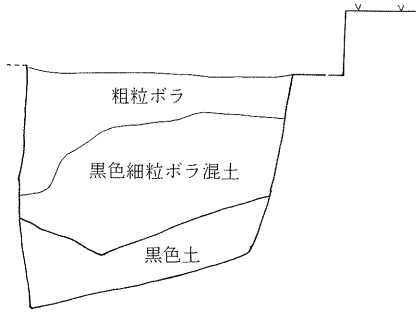
竪坑は、140 cm×100 cmの隅丸長方形プランを呈し、羨道は、竪坑北壁東側に開口している。羨門施設は確認できなかったが、開口部分を下から黒色土、黒色細粒ボラ混土、粗粒ボラと埋土が３層に分けられる。羨道の長さは、約100 cmで、幅は羨門部で80cm、中央付近で85cm、玄門部で約100 cmを測る。高さは、中央付近で約50cm程である。また、羨道内にはボラが堆積しており、側壁または天井の落下によると考えられる。これを考慮すると、羨道東側の側壁は本来もう少しせり出していたと思われる。その他、竪坑から玄室の方向へなだらかに傾斜している。

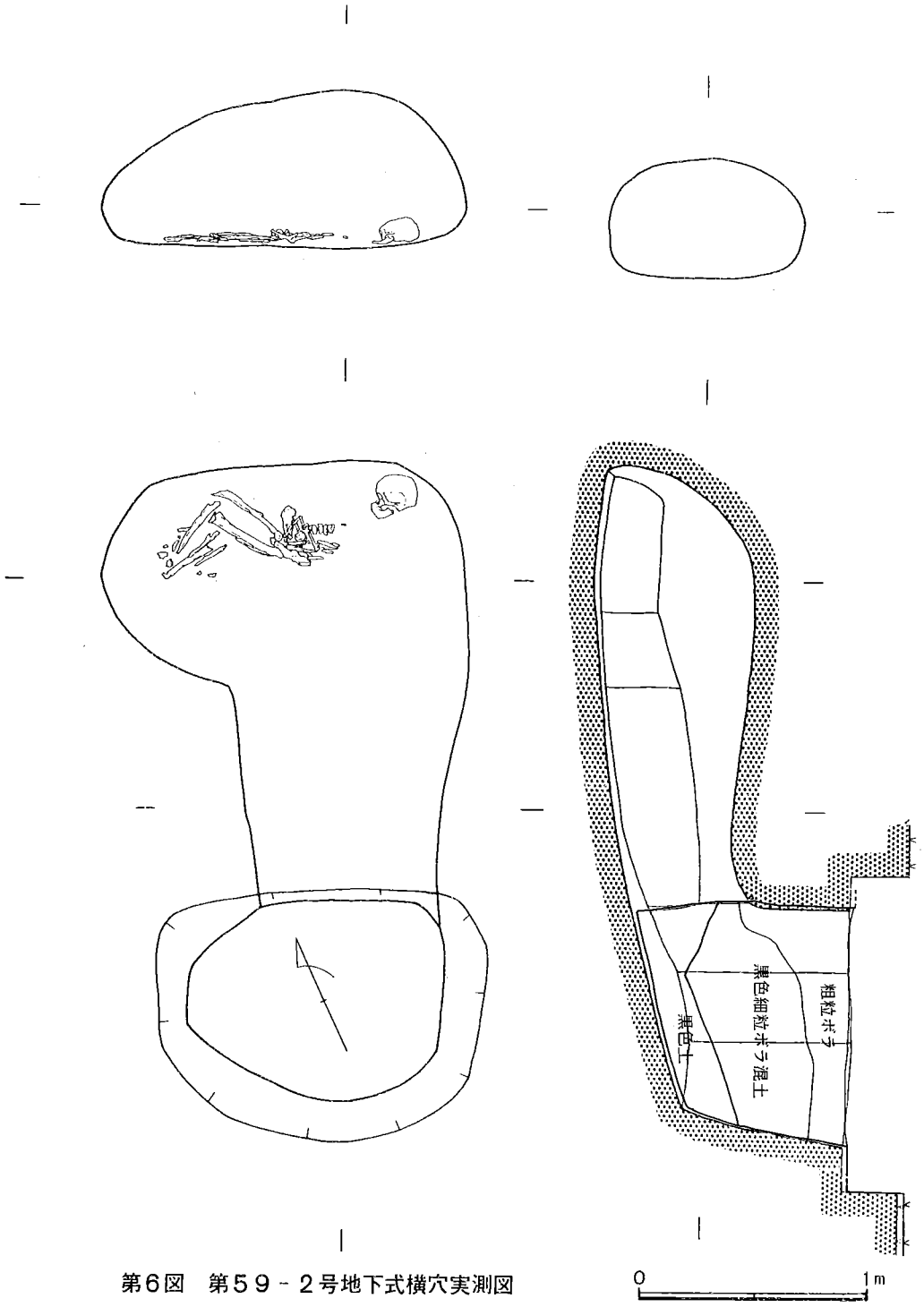
玄室は、北西側の両隅が丸くなっているより、半隋円状の曲線を呈しており、長辺（北測）が160 cm，短辺（西側）が90cmの基本的には長方形プランである。高さは、中央部やや右よりで最大高約70cmを測り、西北西へなだらかに下降している。天井の形状は、ボラ層内の構築のため明瞭ではないが、アーチ状をなしていたと考えられる。

人骨は、玄室右手、東南東に頭、西北西に脚を向けた１体が出土した。老年女性である。人骨の胸部は、ほとんど消失しており、頭蓋骨には未の付着がみられる。また、第59－１－２号人骨と同様に膝を立てた（曲げた）状態で出土している。副葬品は、まったく発見できなかった。



第６図　第５９－２号地下式横穴実測図


粗粒ボラ
黒色細粒ボラ混土
黒色土



第6図　第59－2号地下式横穴実測図

(4) 第59－3号

2．遺　構（第7図，図版9）

第59－3号は、主軸方位がN35°Wで、竪坑を南東，玄室を北西に配した両袖形で、玄室奥壁に球形の突出部を設けた地下式横穴である。

竪坑は、100cm×70cmの長方形プランで、東側両端が隅丸というより隋円状の曲線となっている。羨道入口は、竪坑の北西角に設けられ、羨道は長さ約60cm，断面は一辺50cm，高さ70cmの五角形を呈している。

玄室は北東に細長い両袖形で、四角は隅丸となっている。長辺は約175cm，短辺は玄室右側で最大約80cm，左側で最大約60cmであり、最小約35cmを測る。また、奥壁の中央付近に奥行約35cm，幅約45cm，高さ約25cmの球形状の突出部が付設している。

この地下式横穴は、竪坑内から黒色土が羨道に流れ込んだり、羨道側壁や玄室天井にもぐら穴と思われる直径10cm程の穴があり、これらから大量の土砂が羨道・玄室内に堆積していた。このため人骨はほとんど確認できず、遺物は、奥壁の北西側に、鉄鏃3本と鉇1本が出土している。遺物の出土状況から人骨は、頭位を南西に向け埋葬されていたと考えられる。

遺構は、御池軽石層内に構築されており、玄室は平入りのアーチ状の構造である。玄室奥の突出部も、軽石層を掘りぬいており、遺物はなにも発見できなかった。

遺　物

鉄鏃（第8図，図版10）

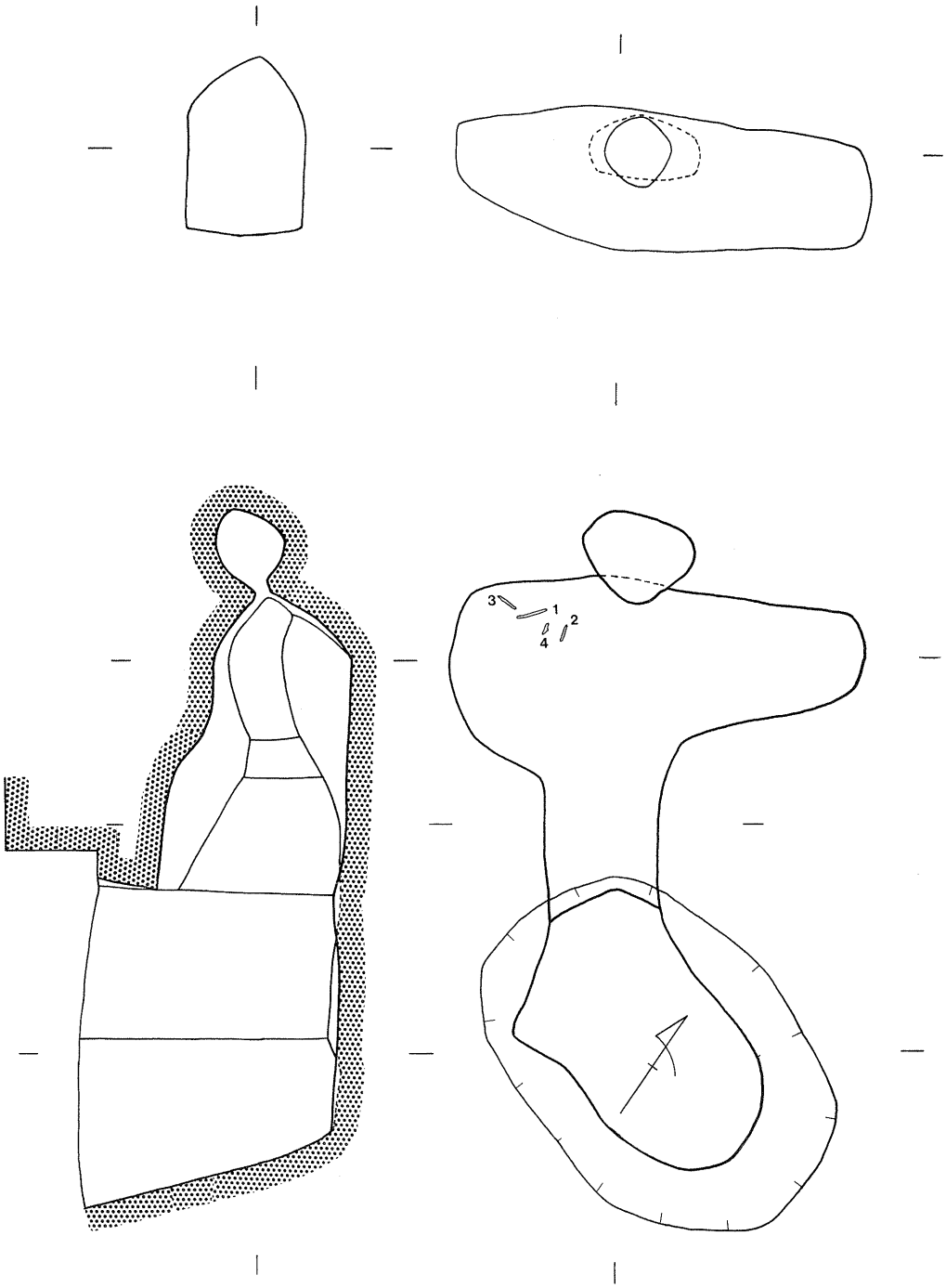
1．細根鏃である。身の厚さは0.3 cm，身幅1.3 cm

2．細根鏃である。現長9.4cm 錆，ボラの付着がひどく原形の復元は難しい

3．細根鏃である。現長12.1cm，矢柄まで9.0 cm

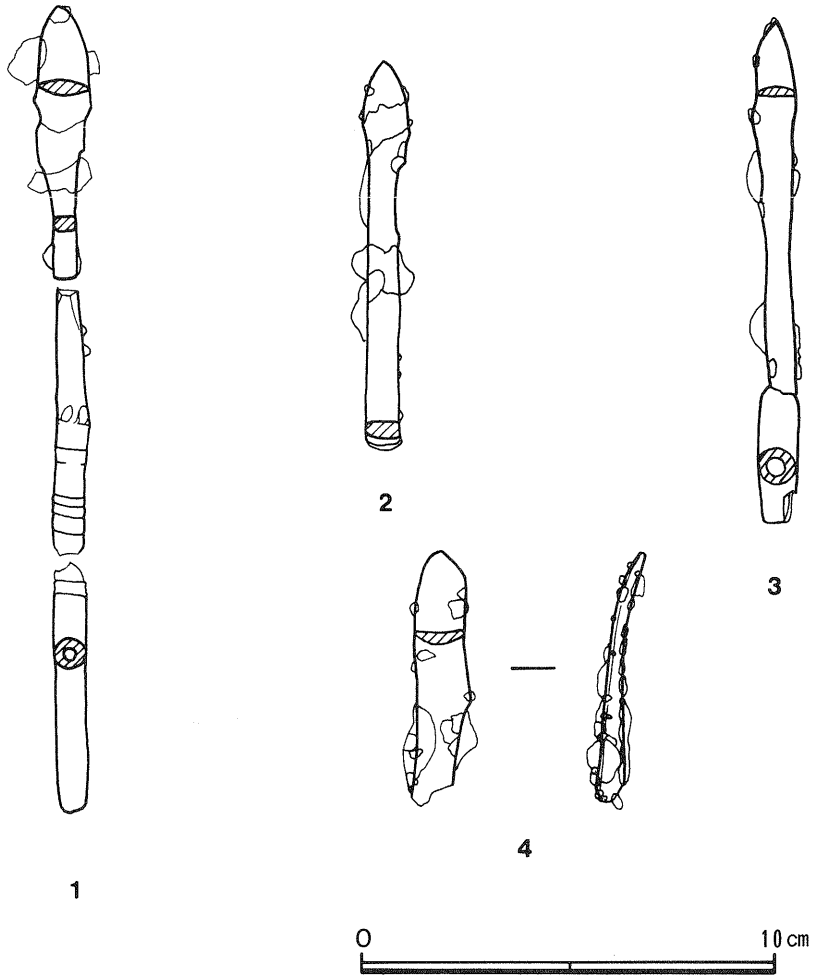
鉇　（第8図，図版10）

4．現長6.2 cm，身幅1.3 cm，身の厚さ0.3 cm



第7図　第59－3号地下式横穴実測図

0　1m



第８図　出土遺物（鉄鏃・鉈）

Ⅳ、まとめ

今回発掘調査した3基の地下式横穴を含め当地区では、14〜15基の地下式横穴が発見されている。（うち発掘調査が実施されたのは8基である。）

今回の3基の地下式横穴を比較すると、まず竪坑の位置関係は、約9〜10 mの等間隔で南北線より約15° 東へ傾いた直線上に連座している。（主軸方位は各々まちまちである。）

次に、羨門閉塞では、1号地下式横穴は軽石によるもの、2・3号は、板様施設によると考えられる。竪坑内の羨門の位置は、1・2号が竪坑の長辺に、3号が竪坑の四隅の一角に設けている。玄室に関しては、1・2号は片袖形（逆P字形）、3号は両袖形で、天井は3基ともアーチ状と思われる。羨道はいずれも平入りの構造である。

ところで、前回調査した第57—4号・5号とは距離的に近く、これらと比較すると、遺構の主軸方位は、第59—2号と同じ方位（北東）である。羨門開塞は板様で、玄室は平入りの[注4]片袖形（逆P字形）を呈している。竪坑における羨門の位置は、第57—4号は竪坑の一角（北東角）であり、第57—5号は竪坑の長辺（北側壁）に設けている。

（下記表参照）

名　称	主軸方位	竪坑形状	羨門閉塞	竪坑における羨門の位置	羨　道	玄　室	人骨	副葬品
第57—1号	N27° E	長方形プラン（隅丸）	板　様	一　角	平入り	逆P字形	不明	ナシ
第57—2号	N27° E	長方形プラン	板　様	長　辺	平入り	逆P字形	3	貝輪 8 鉄鏃 6
第59—1号	N85° E	長方形プラン	軽　石	長　辺	平入り	逆P字形	2	剣　2 鉄鏃 6
第59—2号	N25° E	長方形プラン	板　様	長　辺	平入り	逆P字形	1	ナシ
第59—3号	N35° W	長方形プラン（隅丸）	板　様	一　角	平入り	両袖形	不明	鉄鏃 3 鉇　1

以上から、これら5基の地下式横穴は、形態的に類似し、距離的にも同じ集団に属していると考えてよい。また、竪坑内の羨門の位置は側壁だけでなく、角（コーナー）も利用するようである。時期については、第57—4・5号と同様6世紀前後と考えておきたい。

この他、3号地下式横穴の玄室奥壁に球状の突出部が附設してある。家形の玄室内に棚状施設が設されている例はあるが、球形状のものは、類例がない。また、内部に遺物が発見されておらず、性格については不明である。

最後に、埋葬人骨に関して、3体のみであるが、3体中2体の女性人骨は、膝を立てた（曲げた）状態で出土している特徴がある。

注1）昭和59年7月20日付　指定解除

注2）道路のり面で発見され、人骨のみ取り上げられている。（『都城文化財調査報告書』第3集より）

注3）軽石の閉塞は、都城市内においては、牧ノ原地下式横穴群にみられる。

注4）面高哲郎「菓子野地下式横穴第57・4号・5号発掘調査」『都城市文化財調査報告書』第3集

図　　版

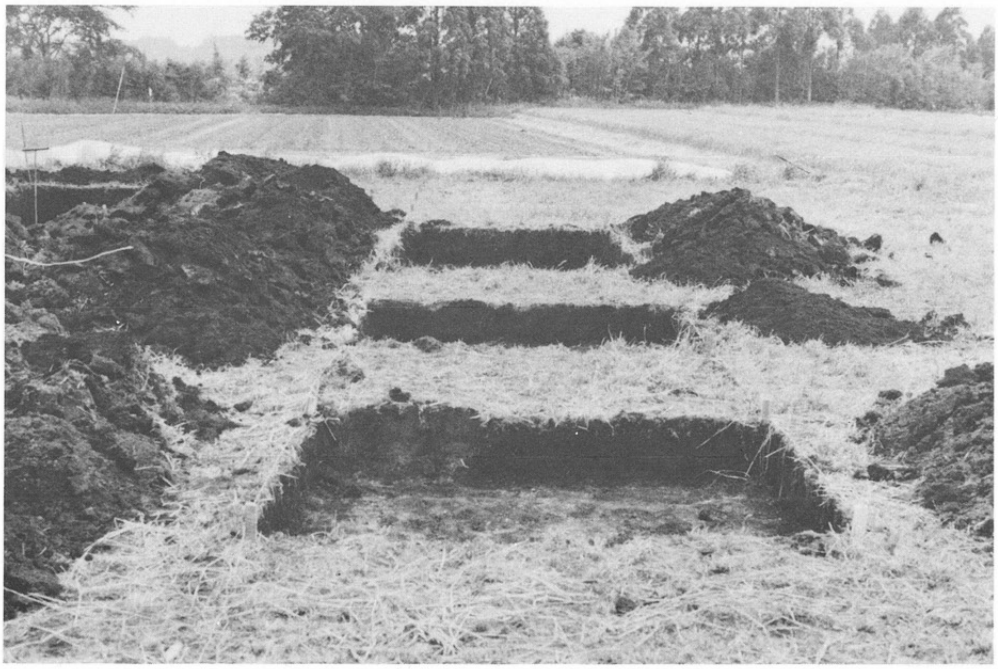
図版1

遺 跡 遠 景 (1)

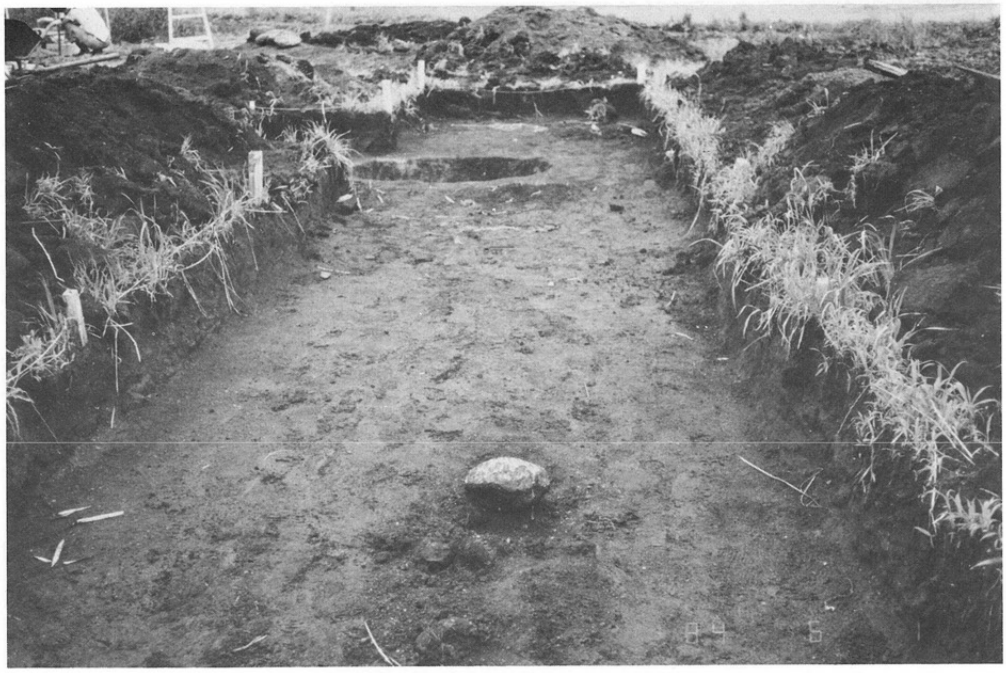
遺 跡 近 景 (2)

図版2

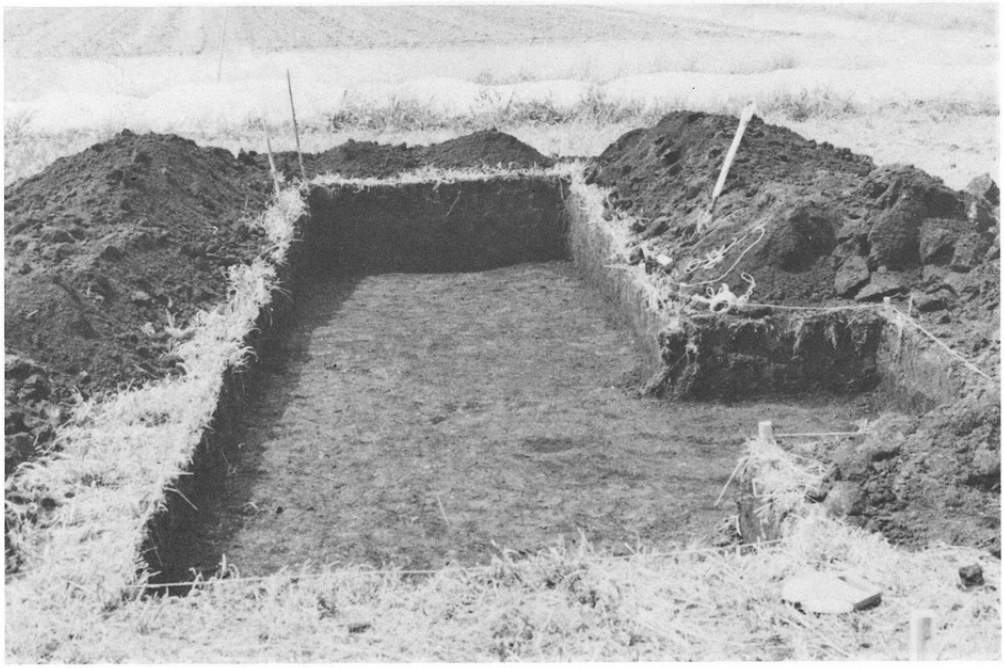
東側トレンチ(1)



西側トレンチ(2)



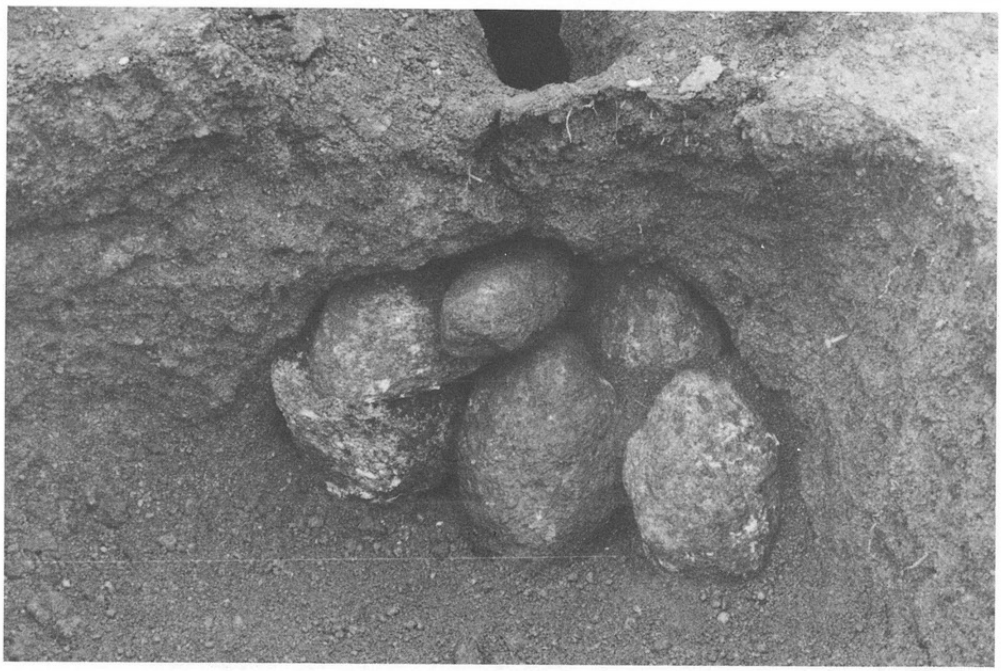
菓子野地下式横穴 第５９－２号(1)



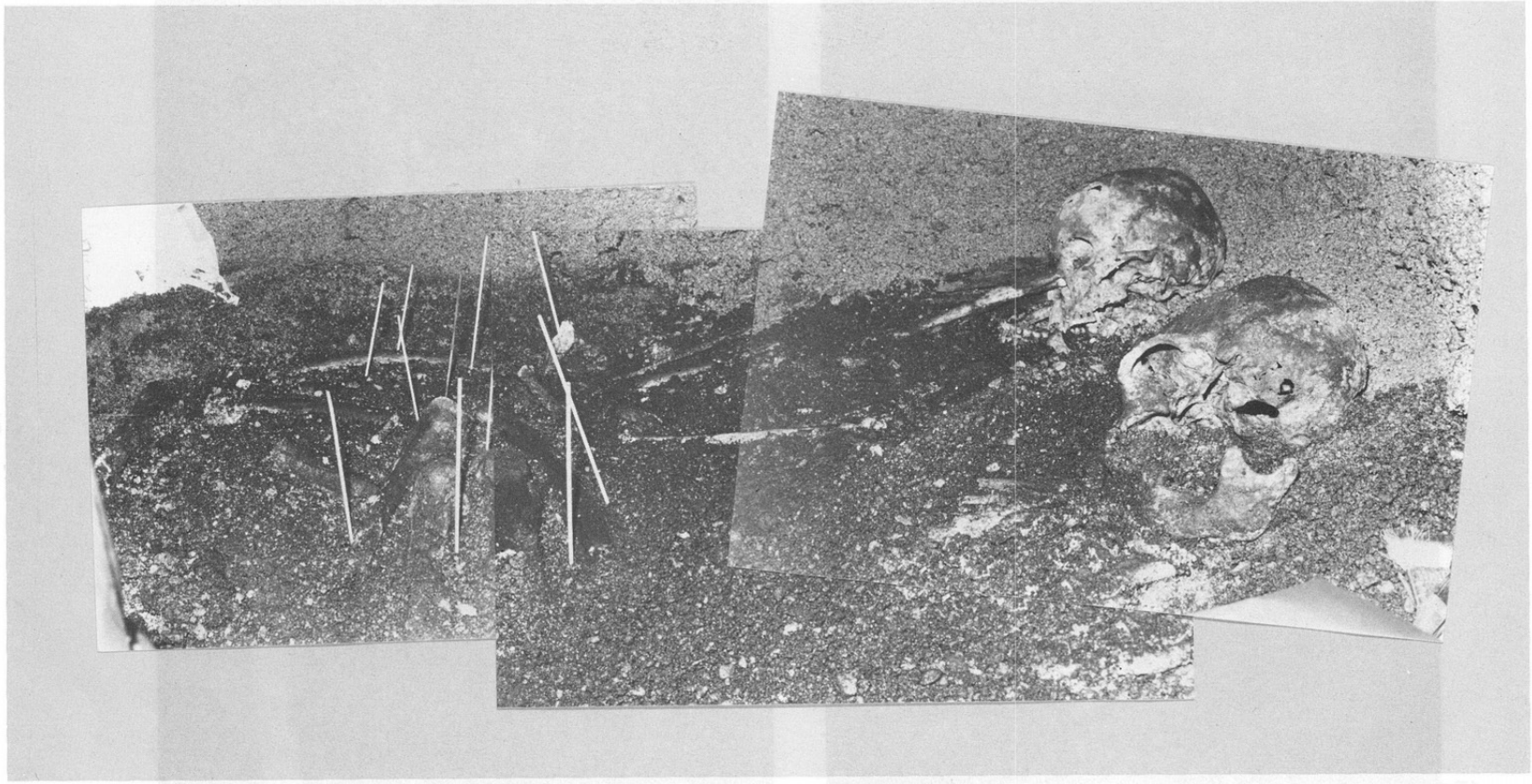
菓子野地下式横穴 第５９－３号(2)

図版４

第５９－１号　竪坑及び閉塞状況(1)



閉塞部拡大 (2)



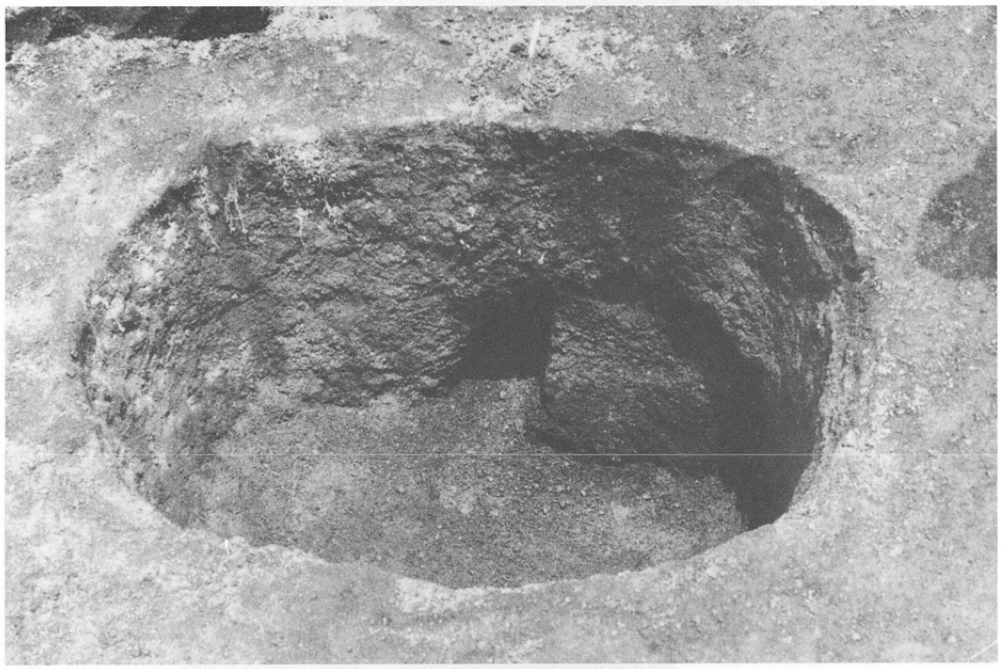
第５９－１－１号人骨（奥）
第５９－１－２号人骨（手前）
出土状況

図版５

図版6

1号 鹿角装剣・短剣・鉄鏃出土状況

出土状況（拡大）



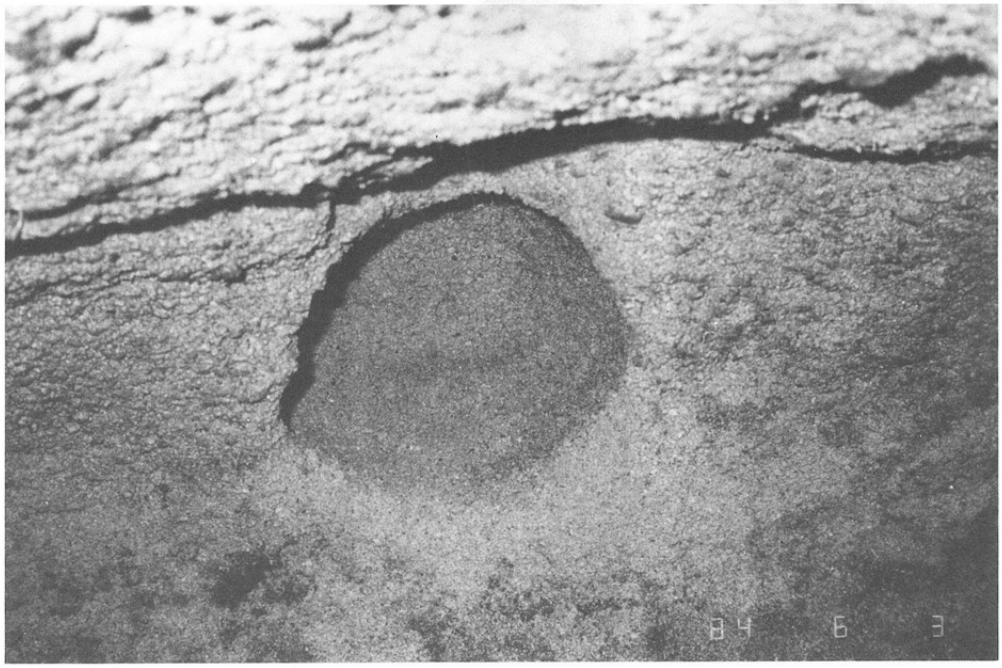
第2号　竪　坑 (1)

第2号 人骨出土状況〔竪坑より〕(2)

図版8

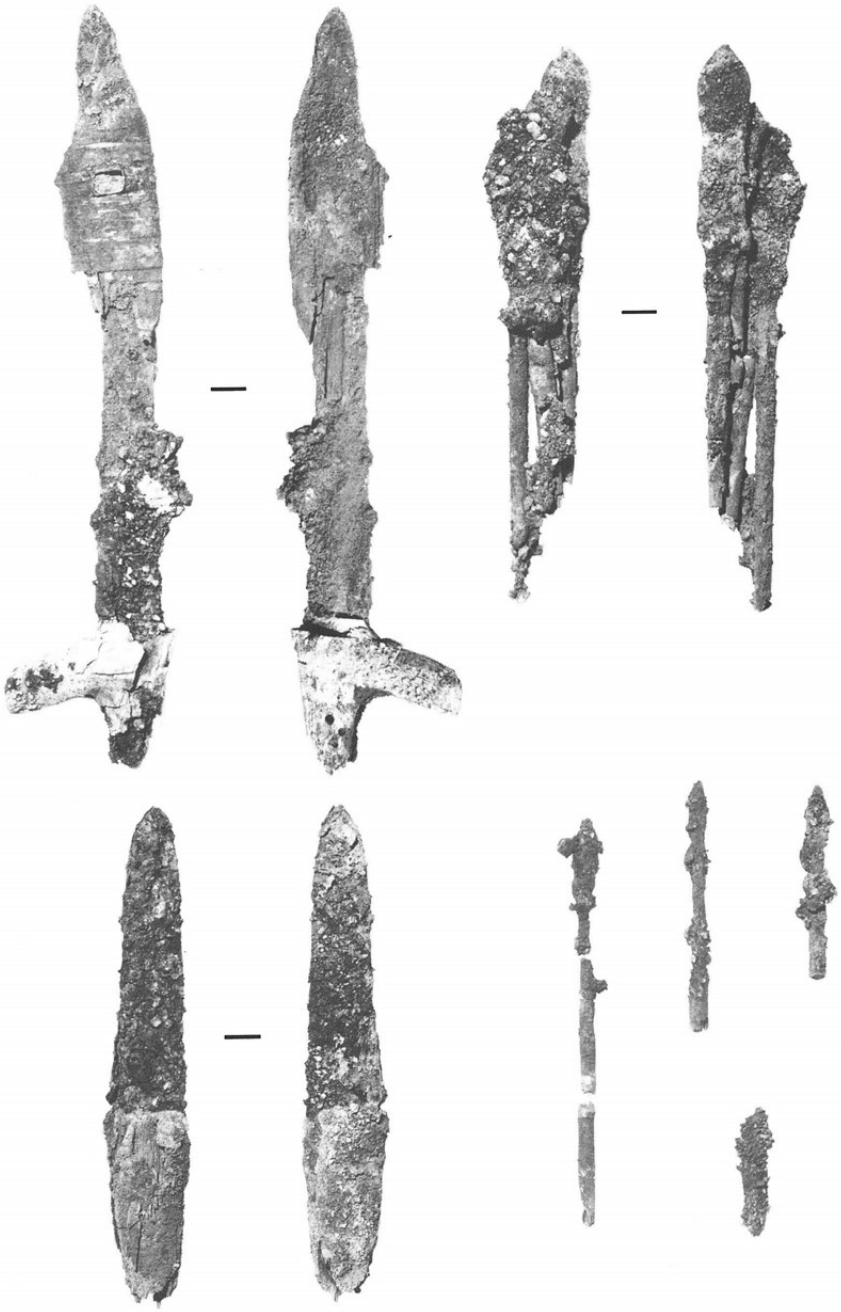
第59－2－1号　人骨出土状況

第３号　竪　坑 (1)



第３号　玄室奥の突出部(2)

図版10



築池地下式横穴

例　　言

1．本報告は、都城市教育委員会が実施した都城市下水流町に所在する築池地下式横穴第59－1号の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、市教育委員会図書館郷土館主事補矢部喜多夫の担当で、昭和59年7月24日から7月27日まで実施した。

3．本報告書に使用した図面の作図は、遺構を矢部が行った。

　遺物の作図、製図は矢部が行った。

4．出土遺物は、都城市教育委員会で保管している。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯……32
Ⅱ　遺跡の位置と環境……33
Ⅲ　調査の記録……34
　(1)第59―1号地下式横穴……34
Ⅳ　まとめ……36

挿図目次

第1図　遺跡所在図……32
第2図　地下式横穴分布図……33
第3図　第59－1号地下式横穴実測図……35
第4図　出土遺物　　剣……37

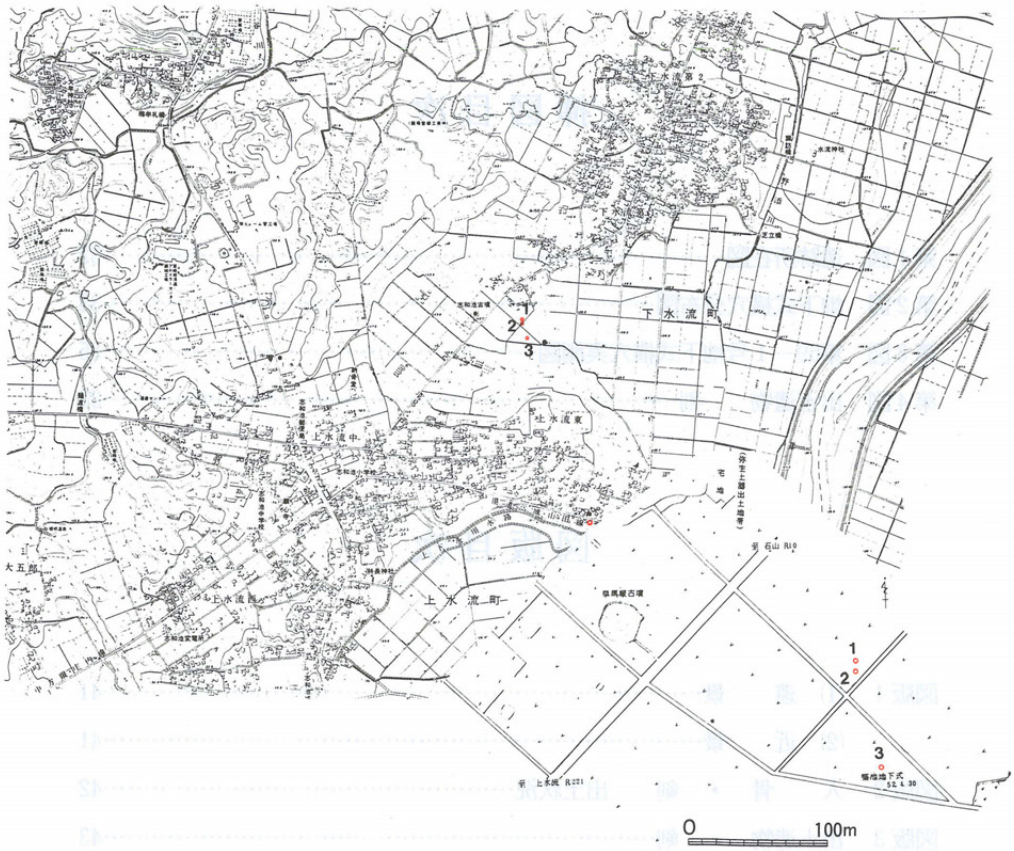
図版目次

図版1　(1)　遠　　景……41
　　(2)　近　　景……41
図版2　人　　骨　・　剣　　出土状況……42
図版3　出土遺物　・　剣……43

Ⅰ　調査に至る経緯

昭和58年４月19日、土地所有者　　が耕転機で耕作中、地面が陥没したのが、今回発掘調査した地下式横穴の発見のきっかけである。その後、現状保存を行なってきたのだが、翌59年７月に同氏より陸稲耕作に支障をきたすため、発掘調査を実施してほしい旨の連絡があった。これを受けて市教育委員会が、発掘調査を実施したものである。

調査は、昭和59年７月24日から27日まで（４日間）行なった。今回調査した地下式横穴を「築池地下式横穴第59－１号」と称する。



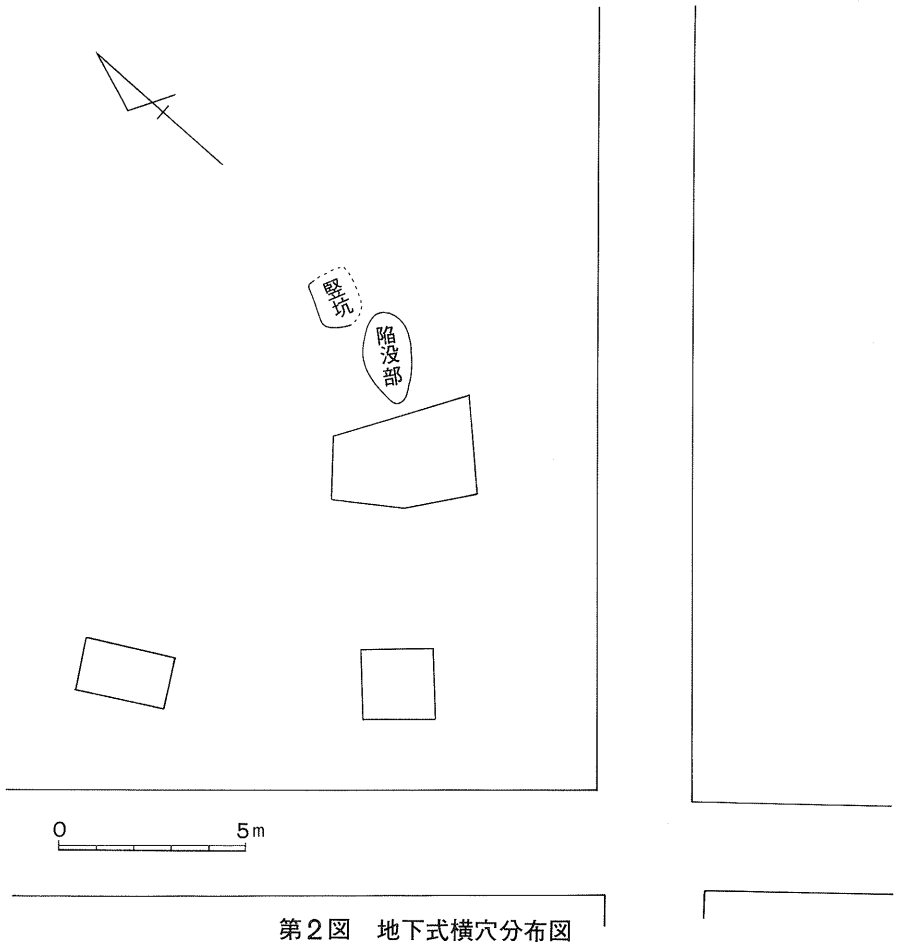
●県指定志和池古墳　１．第59－１号　２．昭和53年発掘地下式　３．昭和52年発掘調査地下式

第１図　遺跡所在図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

都城市下水流町は、都城市北部、霧島山系の裾野東端に位置し、高城町及び高崎町に隣接し、東の高城町との境には大淀川，北の高崎町との境には高崎川，西には丸谷川とほとんど周囲を河川にかこまれているところである。

遺跡は、大淀川西岸の水田地帯にせまる台地上に所在し、水田との比高差は約10m程である。同台地は、県指定の志和池古墳（前方後円墳１，円墳10，地下式横穴１基）が点在しているところである。過去、昭和44年平原で市道路拡幅工事の際、地下式横穴２基が発見され、うち一基が発掘調査されている。[注１]この他昭和48年，52年，53年にそれぞれ１基ずつ発掘調査が実施されている。特に昭和53年に調査されたものは、今回調査した地下式横穴のすぐ南隣りである。



第２図　地下式横穴分布図

Ⅲ 調査の記録

(1)第59－1号

1．遺　構（第3図，図版1・2）

第59－1号地下式横穴は、トレンチャーにより玄室天井部が陥没しており、竪坑は農作物の都合で調査できなかった。玄室にはかなりの崩土が堆積していた。このため人骨は扁平に変形しており原形状を測り知りえなかった。

玄室の主軸方位は、N27° Eで、南に細長い倒卵形をしており、竪坑を北，玄室を南にしている。玄室は御池軽石層内に構築され、左片袖の妻入り型の構造である。天井は、推定ではあるがドーム状ないしは家形を呈していたのではないかと思われる。玄室の規模は、現状で長軸270 cm、短軸35 cmで、天井の高さは計測不可能であるが、現地表から床面までは220 cmを測る。玄室東側壁にえぐれた箇所があるが、これは崩壊による広がりと考えられる。また、竪坑・羨道は、玄室の北西に位置し、羨道は短く、立ち上がりながら、竪坑につづいている模様である。

人骨は、北北東に頭位をとり、頭蓋骨の1部がかろうじて確認できる状態で、残りは扁平に変形している。人骨塊の両端（一端は頭蓋骨周囲）に朱の付着する部分がみられ、交互の2体埋葬の可能性も考えられる。

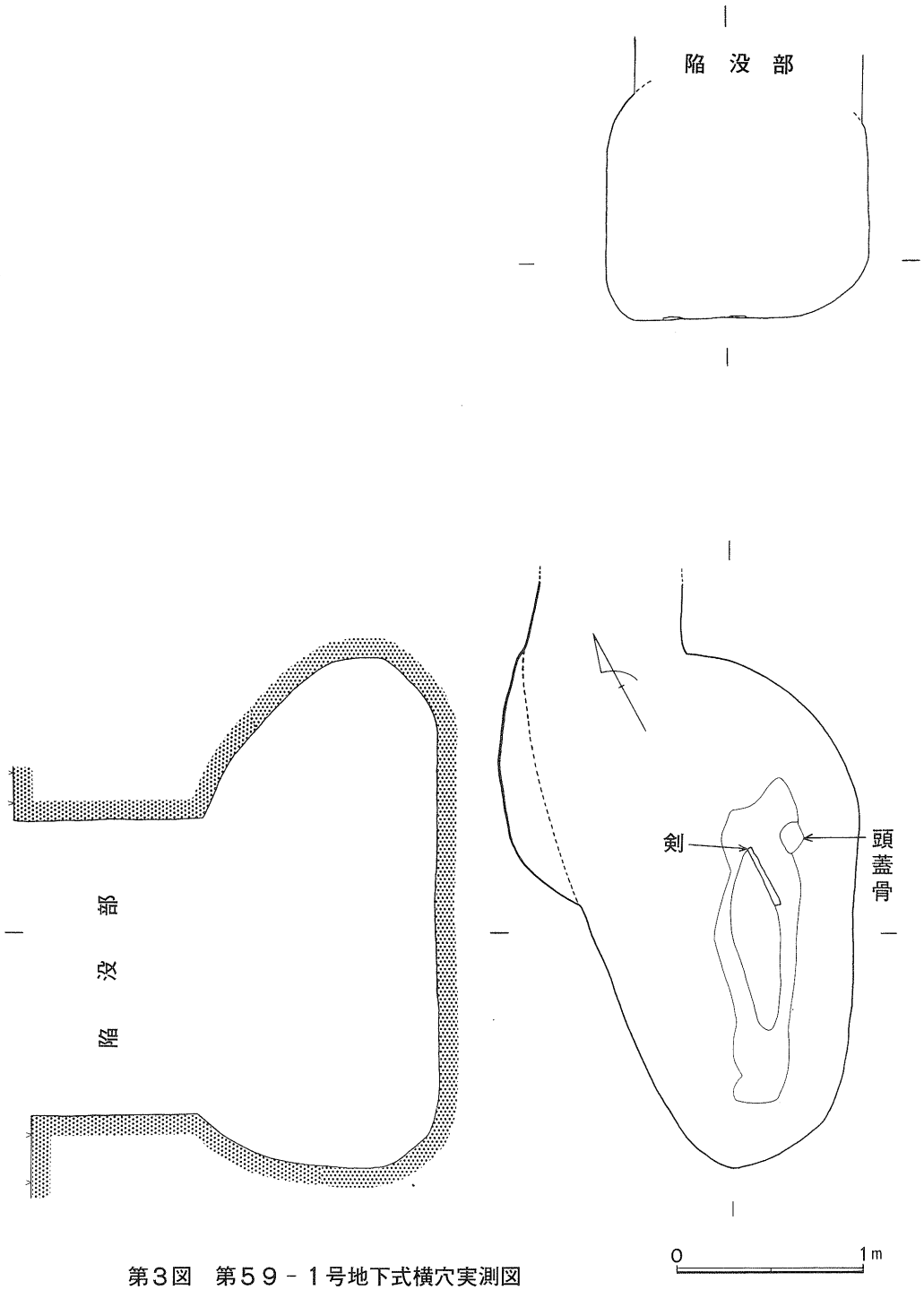
遺物は、残存頭蓋骨の東側約20cmのところから、人骨に付着した状態で、柄を北，鋒先を南にして剣が一振、ほぼ完形で出土している。出土状況から胸部付近（胸部上部）に副葬されていたと考えられる。

出土遺物

剣（第4図，図版3）

いわゆる蛇行剣で、柄の中央，鋒の中央よりやや先で2ケ所折れ、鋒先がごく一部欠足している。柄を北（頭位）に向けて出土している。

現存長45.6cm，茎長10.7cm，鋒34.9cmを測る。柄部には鹿角が残存し、鋒中央部には木質の鞘が一部分残っている。この木質の鞘の筋は、蛇行剣の曲りとは一致しておらず直線である。剣の蛇行は二曲である。



第３図　第５９－１号地下式横穴実測図

Ⅳ、まとめ

今回発掘調査した地下式横穴を含め、下水流地区（築池・平原）では５基の地下式横穴が発掘調査されたわけである。うち昭和53年調査されたものと今回とは、距離にすると数ｍないし10 m程の範囲内に位置している。（正確な距離はつかめない。）[注２]これらを比較すると、片袖形（逆P字形）・妻入寄棟（S59－１号は、寄棟またはアーチ状）と同類であり、福尾正彦氏の分類では、１－C類に属すると思われる。遺構の主軸は、昭和53年のがほぼ東西で、今回のは南北方位であり[注３]、遺構は同心を中心として対峙しているようである。

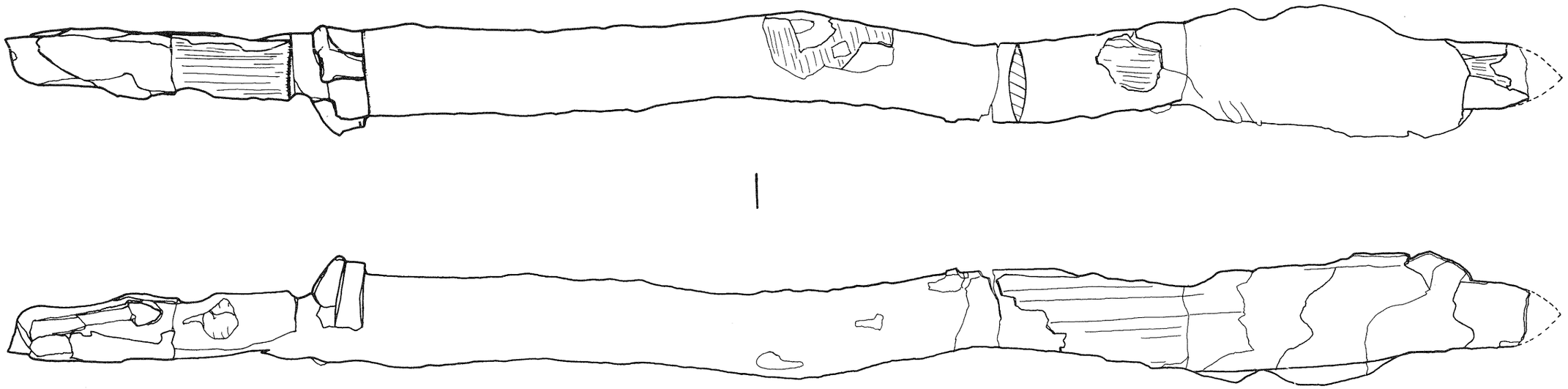
次に、副葬品は、いわゆる蛇行剣が１点のみ出土し、副葬位置は断定はできないが、胸部付近と考えられ蛇行剣の性格を物語っているようである。また、全国各地での蛇行剣の出土数は、現在のところ25点である。[注４]南九州だけに限定すると、前方後円墳，円墳，地下式板石積から各々１点，地下式横穴から８点の出土である。都城市内だけでみると、地下式横穴から３点出土している。これは、市内の地下式横穴群集域（牧ノ原・菓子野・築池）から各々１点ずつ出土していることになる。都城市内という限定であるが、蛇行剣は多少の時間差はあるにしても１群集単位のわりと狭い範囲ごとに存在していたのではないかと思われる。

注１）『宮崎県文化財報告書』第15集

注２）北郷泰道ほか「築池地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第21集

注３）福尾正彦「日向中央における地下式横穴とその社会」『古文化談叢』第７集

注４）田中茂「蛇行状鉄剣について」宮崎考古学会，第６回例会S59．12．1

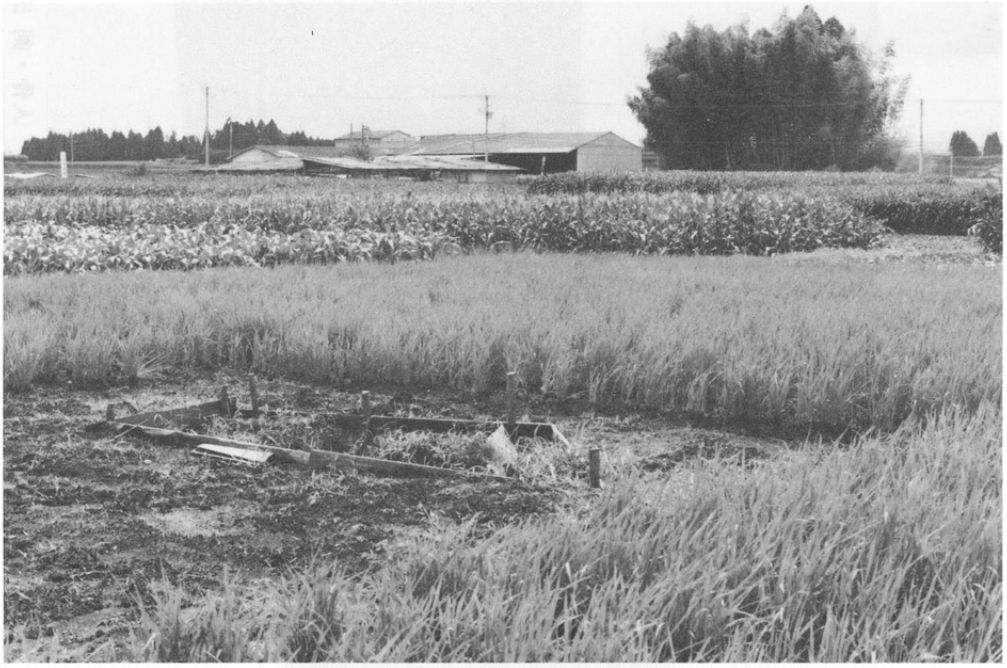


第４図　出土遺物（剣）

図　　版

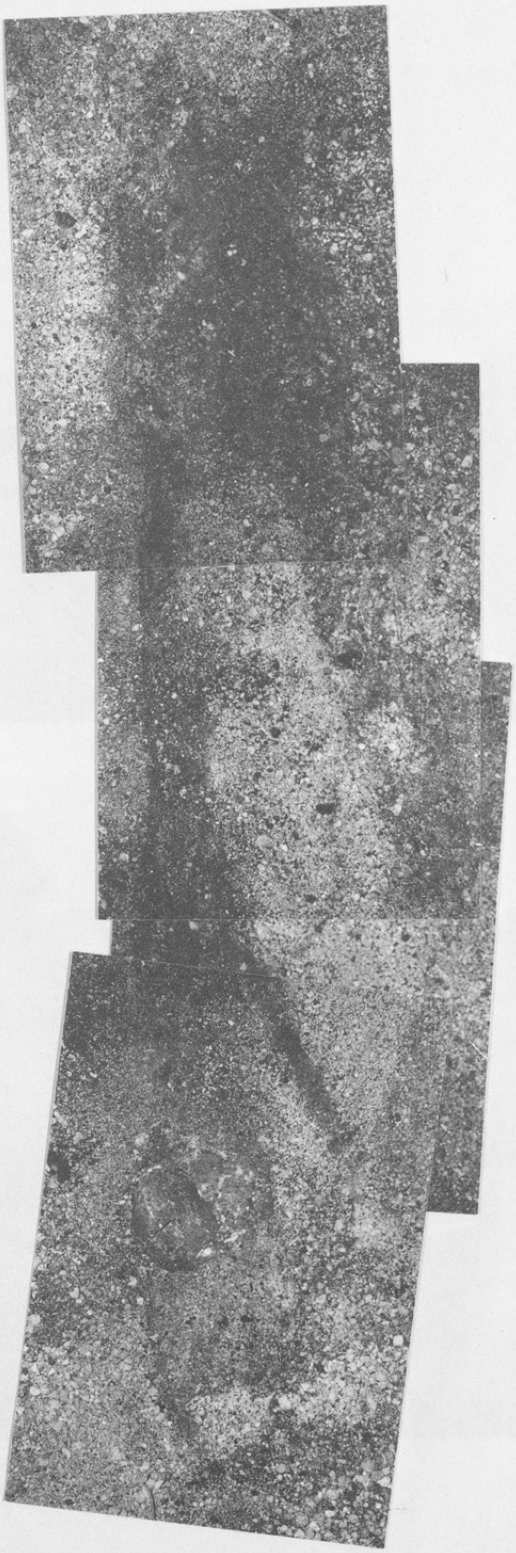
図版 1

遠　景　(1)



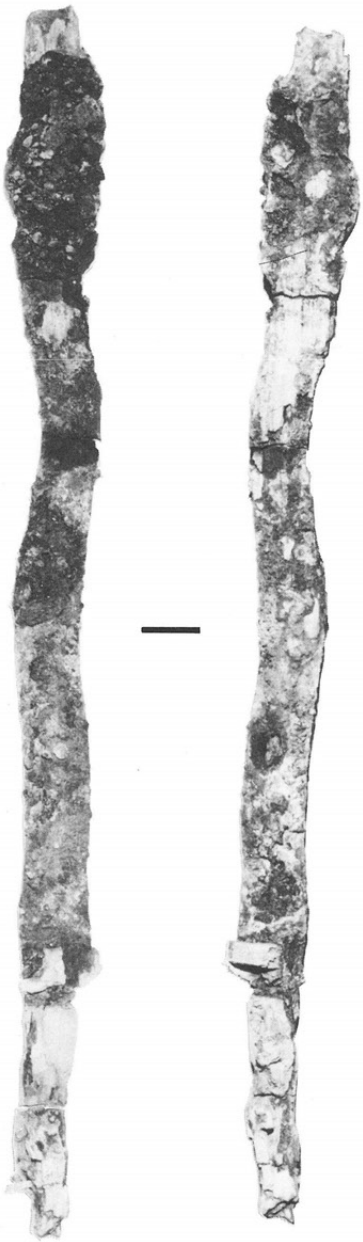
近　景　(2)

図版2



人骨・剣 出土状況

図版3



宮崎県菓子野地下式横穴出土の人骨

小 片 丘 彦・川 路 則 友・峰　　和 治
山 本 美代子・岡 元 満 子

宮崎県菓子野地下式横穴出土の人骨

小片丘彦・川路則友・峰　和治・山本美代子・岡元満子
（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ）

はじめに

昭和59年5月，宮崎県都城市菓子野地区の地下式横穴2基から，2体合葬および単葬計3体の人骨が出土した。所属年代は考古学的資料からほぼ6世紀と思われる。宮崎県下で出土した地下式横穴人骨については内藤（1973，1974），松下（1981a,b)などによる多くの報告があり，その形質が明らかにされつつある。そのうち菓子野地区の地下式横穴人骨は，これまで出土した13体について，すでに松下ら（1983）が報告し，南九州の他の地下式横穴人とは異なる長頭傾向の頭型の存在が指摘されている。今回出土の3体は，菓子野地区人骨の知見を追加する資料であるばかりでなく，南九州地下式横穴人の形質解明の一助となる資料と思われる。人骨調査の機会を与えて下さった都城市立郷土館の諸先生に心から感謝申し上げる次第である。計測は Martin & Saller（1957），Howells(1973)，鈴木(1963)，Woo（1937）および Woo & Morant(1934）の方法に従った。

資料

今回人骨が発見された地下式横穴は59-1号と59-2号の2基であり，前者からは2体(1-1号人骨，1-2 号人骨），後者からは1体（2-1 号人骨）出土した。1号横穴人骨2体はいずれも南頭位，2号横穴人骨は東頭位で，すべて仰向けの伸展葬である。年齢および性別は 1-1号人骨は壮年男性，1-2 号人骨は熟年女性，2-1 号人骨は老年女性と推定される。

所見

1．59-1-1号人骨（男性・壮年）

1号横穴の奥に位置する1体で，ほぼ完全な頭蓋と保存の悪い体幹・体肢骨が残っている。顔面には朱が付着している。

1）頭蓋

頭蓋冠の一部および頭蓋底を一部欠くほかはほぼ完全な頭蓋である。全体に小型で，眉弓は突出するが外後頭隆起の発達は弱い。乳様突起は小さいが幅広く表面は粗雑である。三主

縫合は内板で完全に閉鎖しており，外板でもかなり閉鎖が進んでいる。下顎骨は下顎角を欠いているが，比較的頑丈で下顎枝の幅が広い。オトガイ隆起が顕著に発達している。頭蓋計測値を表1に示す。脳頭蓋では，最大長は177mm と比較的小さいのに比して，最大幅144mm，バジオン・ブレグマ高138mm と比較的大きく，頭型は短頭・高頭・中頭型（長幅示数81.4，長高示数78.0，幅高示数95.8）を示す。顔面頭蓋では，顔高116mm，上顔高65mmと比較的小さく，広顔・広上顔型（Kollmann 顔示数83.8，上顔示数46.9）を示す。また，眼窩示数は78.0で中眼窩型，鼻示数は44.6で狭鼻型である。全側面角は80.5° と突顎に近い中顎型に属す。鼻根部および顔面平坦度計測値を表2に示した。前頭骨の平坦性は弱く（前頭骨平坦示数18.9），頬骨の張り出しも少ない（水平弯曲示数17.2）。鼻骨は幅広く（鼻骨最小幅9mm），鼻根部は扁平である（鼻根弯曲示数82.6，前頭突起水平傾斜角81°）。歯列は次の通りである。

×	◎	6	5	4	3	2	1	○	2	3	4	5	6	◎	●
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	c													c	

○：死後脱落，歯槽開放
◎：生前脱落，歯槽不完全閉鎖
●：生前脱落，歯槽完全閉鎖
×：先天性欠如
c：齲蝕

上顎右智歯部に一部破損が見られるが，智歯植立の余地がないことや下顎右智歯が挺出していることから，上顎右智歯は先天性欠如の可能性が高い。$\overline{7}$ の頰側歯頸部と咬合面，$\underline{7}$ の咬合面にそれぞれ齲蝕が見られる。全歯に歯石が沈着し，歯槽骨吸収が上・下顎とも認められる。咬耗は $\overline{8}$ がMartin の0度であるほかは，大部分が2度を示す。咬合様式は鉗子状である。

2）体幹骨

頸椎片，胸椎片および腰椎片十数個が残っているが保存はかなり悪い。椎体は比較的小さい。骨棘形成など特別な所見は見られない。

3）体肢骨

体肢骨の計測値を表3に示す。鎖骨は右のみほぼ完全に残っており，比較的細くて長い。肩甲骨は右の外側部だけがある。上腕骨は保存が悪いが左右の骨体が残っている。骨体は細くはないが短く，三角筋粗面など筋付着部はよく発達している。橈骨は左右の骨体があり，細く，筋付着部が発達している。尺骨は右骨体の一部だけが残っている。

寛骨は右では腸骨の一部および恥骨があり，左ではほぼ完全な腸骨翼とそれに連続する寛骨臼の一部および恥骨がある。恥骨結合面には平行隆線は認められず，表面がややくぼんで小孔が見られる。大腿骨は右は骨体だけであるが，左は骨頭から下端まで不完全ながら残っている。骨体上部の横径は矢状径に比してかなり大きく，広型（上骨体断面示数右82.8，左83.3）を示している。骨体の前弯は強度で，顕著な柱状形成が見られる（骨体中央断面示数右 124.0，左 122.0）。殿筋粗面や粗線の発達は良い。膝蓋骨は左右とも小型である。右膝蓋骨関節面の外側下部に辺縁に沿って磨耗による半月形の滑沢な面がある（図版4－F）。脛骨は左右とも骨体が残っている。栄養孔位での扁平性は認められない（脛示数右65.2，左64.7）。左大腿骨最大長から算出した推定身長は156.1cm（Pearson）である。

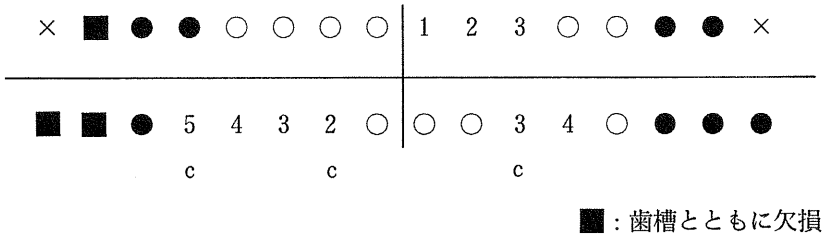
2．59-1-2号人骨（女性・熟年）

頭蓋左半と保存の悪い体幹・体肢骨がわずかに残るだけである。側頭部から下顎骨にかけてわずかに朱が付着している。

1）頭蓋

全体に小型で眉弓，外後頭隆起および乳様突起の突出は弱い。三主縫合は内板では完全に閉鎖が完了し，外板でもかなり閉鎖が進んでいる。頑丈な下顎骨で，下顎枝の幅は広く（最小下顎枝幅40mm），骨体も厚い（下顎体厚14mm）。弱い下顎隆起が両側に認められる。脳頭蓋では，右半分を欠損しているので最大幅を計測することはできないが，観察では最大長に比してかなり小さかったと思われ，頭型は長頭型もしくは長頭に近い中頭型であったと推定される。側面観では中頭型（長高示数74.4）を示す。顔面頭蓋でも頬骨弓幅や中顔幅が計測不能で示数を算出することはできないが，顔高は105mm，上顔高は66mmとそれぞれ低く，観

察でも広顔傾向を示すと思われる。眼窩示数は73.6で低眼窩型，鼻示数は56.5で広鼻型である。鼻根部および顔面平坦度計測値を表２に示す。頬骨は比較的張り出し（水平弯曲示数22.6），鼻根部は扁平である（鼻根弯曲示数86.4）。歯列は次の通りである。



■：歯槽とともに欠損

咬耗は大部分の歯がMartin の２度を示す。$\overline{5\ 2\ |\ 3}$に齲蝕が見られる。咬合様式は鉗子状である。

２）体幹骨

ほとんど残っておらず，細片ばかりである。

３）体肢骨

上肢骨は残っていない。下肢骨は左右大腿骨の下端付近，左膝蓋骨片，左右脛骨の上端付近および左腓骨上端が残っているがかなり保存が悪い。計測値を表３に示す。大腿骨では粗線の発達がよいが，柱状形成は見られない。脛骨は弱い扁平性を示す（脛示数右62.9）。右大腿骨の外側顆関節面の前面に磨耗による小指頭大の滑沢な面が認められる。その中央大部分には骨皮質はなく海綿質が露出している（図版４－E）。対応する右膝蓋骨は残っていない。また内側顆の関節面の縁に沿って骨棘形成がある。右脛骨上端の関節面には特別の所見はない。なお上記の磨耗面および骨棘は左の膝関節には認められない。

３．59-2-1号人骨（女性・老年）

頭蓋左半分と保存の悪い体幹・体肢骨が残っている。上顔面および側頭部にわずかに朱が付着している。全身にわたって骨の緻密質が極めて薄く，海綿質は粗で骨梁は細く，骨多孔症の状態を示している。

1）頭蓋

かなり小型の頭蓋で，眉弓と外後頭隆起の突出は弱く，乳様突起の表面はやや粗雑であるが，小さく垂直に下垂する。三主縫合は内・外板ともにほぼ完全に閉鎖を完了している。左外耳道の前後壁に顕著な外耳道骨瘤が認められる（図版４－A）。脳頭蓋では最大幅の計測ができないが，上面観の観察では中頭型を示すと思われ，側面観では低頭型（頭長・耳ブレグマ高示数55.8）である。顔面頭蓋は欠損部が多いので計測および観察がほとんど不可能である。わずかに残っている上顎左臼歯部では歯槽が閉鎖している。下顎骨は頑丈で，⌈5が死後脱落，⌈6部には約16×13mmの楕円状の陥凹がある（図版４－B）。根尖部病変によるものと思われる。また⌈７８は生前に脱落し歯槽は完全に閉鎖している。そのほか，遊離歯として確認できたものに⌈2と3⌋があり，いずれも咬耗はMartin の２度である。

2）体幹骨

数個の腰椎片，仙骨片および肋骨片が残っているが，いずれも骨質がもろく，保存がかなり悪い。腰椎の椎体縁には骨棘形成が認められるほか，第３腰椎と思われる椎体片が楔状椎の形状を示している（図版４－C）。

3）体肢骨

上肢骨では，左右の橈・尺骨の主として骨体が残っており，下肢骨では，左右寛骨の一部，左右大腿骨および左右脛骨が残っているが，いずれも保存は極めて悪く，計測できる項目は非常に少ない。右恥骨の後面に，恥骨結合面の縁に沿って，幅約５mmの深い溝が縦走する（図版４－D）。

考　察

今回出土の３体のうち，保存の良い1-1 号の頭蓋計測値について，宮崎県下で出土した他の地下式横穴人との比較を行った。比較に用いたのは57年度発掘の菓子野地下式横穴人（松下ら，1983）とそれ以外の南九州地下式横穴人（松下ら，1983）である（表４）。

脳頭蓋では最大長が比較群に比べてかなり小さいが，逆に最大幅は，松下らの菓子野地下式横穴人より大きな値を示す。したがって，59-1-1号の頭型（短頭・高頭・中頭型）は，松下らの菓子野地下式横穴人（長頭・中頭・尖頭型）や南九州地下式横穴人（短頭・中頭・中頭型）と異なる。顔面頭蓋は広・低顔傾向を示し，比較群と形質的に類似している。眼窩示

数はどの比較群とも共通する中眼窩型を示すが，鼻示数は狭鼻型に属し，比較群（広鼻型）とはかなり異なる。

体肢骨については，全般に保存が悪く，かろうじて比較に用いることができるのは1-1 号だけである。下肢骨に関して，菓子野55-1-1号および57-5-3号と比べると（表５），大腿骨最大長はほぼ同長で短い。大腿骨骨体上部の扁平性および脛骨の扁平性については57-5-3号とは異なるものの，55-1-1号とは共通の傾向を示す。

以上のことから，今回出土した３体の人骨の形質には，これまで発掘された菓子野地下式横穴人や他の南九州地下式横穴人とやや異なる形質が存在するものの，類似する部分も多く，すべて南九州地下式横穴人形質の範疇に入るものと理解してよいと思われる。

特記所見ないし病的痕跡が３体いずれにも認められる。すなわち，1-1 号には右膝蓋骨関節面の磨耗，1-2 号には右大腿骨外側顆関節面の磨耗があり，従って，1-1 号男性と1-2 号女性は，ともに生前，膝関節を過度に使用する生活を営んでいたことが想定される。また，2-1 号には全身的な骨多孔症のほか、左外耳道前・後壁の顕著な外耳道骨瘤，⌈6 相当部の根尖部病変の痕跡，腰椎の楔状化および恥骨後面の恥骨結合縁に沿う縦溝が存在する。恥骨後面の縦溝は，一般に女性に強く出現する（後旁関節溝，小山，1957）が，同部位にはまた小窩を認めることがある。小窩については，Stewart（1957）以降多くの研究があり，妊娠，出産の既往を有力に示唆する痕跡ともいわれているが，日本の古人骨では，すでに吉岡ら（1983）が広島県の古墳人骨に見られた１例を報告している。この小窩と溝とは無関係ではなく，小窩が合して溝を形成する一連の骨変化とみなされている（Ullrich, 1975)。 以上のことから，2-1 号女性については，閉経後に強く現われるという全身的な骨多孔症からみて，かなりの高齢に達していたと思われるほか，晩年，円背であったろうこと，経産婦の可能性が濃厚であることなど，生活歴の一端をうかがうことができる。

総 括

１．昭和59年５月，宮崎県都城市菓子野地下式横穴２基から２体合葬および単葬計３体の人骨が出土した。所属年代はほぼ６世紀である。

２．３体の内訳は，壮年男性（1-1 号），熟年女性（1-2 号）の合葬人骨および老年女性人骨（2-1 号）である。脳頭蓋では，1-1 号が短頭・高頭・中頭型を示し，他の２体は最大幅が計測不能であるが，上面観の観察では中頭型ないしは長頭型を示すものと思われるほか，側面観では1-2 号は中頭型，2-1 号は低頭型を示す。顔面頭蓋では1-1 号が広顔・広上顔型

を示す。鼻根部は3者とも扁平である。また，下顎骨はいずれも極めて頑強である。

3．体肢骨は保存が悪く，かろうじて1-1 号だけが観察可能である。全般に筋付着部の強い発達が見られ，大腿骨骨体上部の扁平性が強く，骨体の前弯は強度で柱状形成も著しい。脛骨の扁平性は弱い。1-1 号の推定身長は約 156cmである。

4．特記所見として顕著な外耳道骨瘤，恥骨結合後縁の溝のほか，骨多孔症，大臼歯の根尖部病変，椎体縁の骨棘形成と楔状椎，膝関節関節面の磨耗といった病的所見が認められる。

参 考 文 献

Howells, W. W., 1973 : Cranial Variation in Man. Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., Vol.67, Harvard Univ.

Martin, R. & K. Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. G. Fischer, Stuttgart.

松下孝幸, 1981a: 日守地下式古墳出土の人骨. 宮崎県文化財調査報告書, 第23集 : 169 - 178.

松下孝幸, 1981b: 宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨. 宮崎県文化財調査報告書, 第24集: 114 - 134

松下孝幸・分部哲秋・石田 肇, 1983: 宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨. 都城市文化財調査報告書, 第3集: 105 - 145.

内藤芳篤, 1973: 灰塚地下式横穴人骨. 灰塚遺跡: 72 - 77.

内藤芳篤, 1974: 人骨. 大萩遺跡(1): 55 - 62.

小山光昭, 1957: 日本人恥骨結合面の年齢的変化. 東京慈恵会医科大学雑誌, 72(10): 1991 - 2017.

Stewart, T. D., 1957: Distortion of the pubic symphyseal surface in females and its effect on age determination. Am. J. Phys. Anthrop., 15:9-18.

鈴木 尚, 1963: 日本人の骨. 岩波書店.

Ullrich, H., 1975 : Estimation of fertility by means of pregnancy and child-birth alterations at the pubis, the ilium, and the sacrum. Ossa, 2:23-39.

Woo, T. L. & G. M. Morant, 1934: A biometric study of the flatness of the facial skeleton in man. Biometrika, 26: 196 - 250.

Woo, T. L., 1937: A biometric study of the human malar bone. Biometrika, 29: 113 - 123.

吉岡郁夫・早川正市, 1983: 第3号人骨. 広島県府中市府中・山ノ神1号古墳発掘調査報告: 36-38.

表 1　頭蓋計測値（mm）および示数

Martin's No.	計測項目	59-1-1号（男・壮）	59-1-2号（女・熟）	59-2-1号（女・老）
1	頭蓋最大長	177	176	171
5	頭蓋基底長	104	97	-
8	頭蓋最大幅	144	-	-
9	最小前頭幅	94.5	-	-
11	両耳幅	128	-	-
17	バジオン・ブレグマ高	138	131	-
20	耳ブレグマ高	113.5	107	95.5
23	頭蓋水平周	512	-	-
24	横弧長	324	-	-
26	正中矢状前頭弧長	126	122	-
27	正中矢状頭頂弧長	120	131	121
29	正中矢状前頭弦長	112	109	-
30	正中矢状頭頂弦長	109	115	108.5
40	顔長	99	97	-
45	頬骨弓幅	138.5	-	-
46	中顔幅	95	-	-
47	顔高	116	105	-
48	上顔高	65	66	-
51	眼窩幅Ⅰ　（左）	41	43.5	-
51a	眼窩幅Ⅱ　（左）	39.5	41.5	-
52	眼窩高　（左）	32	32	34.5
54	鼻幅	22.5	26	-
55	鼻高	50.5	46	-
61	上顎歯槽幅	63	-	-
H	Vertex Rad.	123	-	-
H	Nasion Rad.	94.5	-	-
H	Subspinale Rad.	95	-	-
H	Prosthion Rad.	99.5	-	-
65	下顎頭間幅	129	-	-
68(1)	下顎骨長	97	-	-
69	オトガイ高	27	(31)	-
69(3)	下顎体厚　（左）	13.5	14	14
70a	下顎頭高　（左）	53.5	-	-
71a	最小下顎枝幅　（左）	37	40	34
72	全側面角	80.5°	-	-
8／1	頭蓋長幅示数	81.4	-	-
17／1	頭蓋長高示数	78.0	74.4	-
17／8	頭蓋幅高示数	95.8	-	-
20／1	頭長・耳ブレグマ高示数	64.1	60.8	55.8
47／45	Kollmann 顔示数	83.8	-	-
47／46	Virchow　顔示数	122.1	-	-
48／45	Kollmann 上顔示数	46.9	-	-
48／46	Virchow　上顔示数	68.4	-	-
52／51	眼窩示数　（左）	78.0	73.6	-
54／55	鼻示数	44.6	56.5	-

表２　鼻根部・顔面平坦度計測値（mm）および示数

計測項目		59-1-1号（男性）	59-1-2号（女性）
a	前頭骨弦	95	-
b	垂線高	18	-
c	頬骨水平弧	64	60
d	頬骨水平弦	58	53
e	水平弧高	10	12
f	頬骨垂直弧	46	45
g	頬骨垂直弦	44	44
h	前眼窩間幅	19	19
i	鼻根横弧長	23	22
j	鼻骨最小幅	9	7
k	前頭突起水平傾斜角	81°	-
l	前頭突起上幅（左）	9	-
b／a	前頭骨平坦示数	18.9	-
e／d	水平弯曲示数	17.2	22.6
h／i	鼻根弯曲示数	82.6	86.4

表 3　体肢骨計測値(mm)および示数

Martin's No.	計測項目		59-1-1号 (男性)	59-1-2号 (女性)	59-2-1号 (女性)
鎖骨					
1	最大長	(右)	150	-	-
4	中央垂直径	(右)	12	-	-
5	中央矢状径	(右)	10.5	-	-
6	中央周	(右)	39	-	-
肩甲骨					
12	関節窩長	(右)	34.5	-	-
13	関節窩幅	(右)	23	-	-
上腕骨					
3(2)	外科的頸横厚	(右)	33	-	-
5	中央最大径	(右)	(23)	-	-
		(左)	(22)	-	-
6	中央最小径	(右)	(15.5)	-	-
		(左)	(15)	-	-
6b	骨体中央横径	(右)	(18)	-	-
		(左)	(20)	-	-
6c	骨体中央矢状径	(右)	(22)	-	-
		(左)	(19)	-	-
7	骨体最小周	(右)	59	-	-
		(左)	60	-	-
7a	中央周	(右)	(66)	-	-
		(左)	(65)	-	-
橈骨					
1a	頭粗面間距離	(左)	-	-	24.5
3	最小周	(右)	-	-	39
		(左)	41	-	36
4	骨体横径	(左)	16.5	-	-
4a	骨体中央横径	(左)	(15.5)	-	-
4(1)	頭横径	(左)	-	-	18
4(2)	頸横径	(左)	-	-	12.5
5	骨体矢状径	(左)	12	-	-
5a	骨体矢状径	(左)	(12)	-	-
5(1)	頭矢状径	(左)	-	-	18
5(2)	頸矢状径	(左)	-	-	14
5(3)	頭周	(左)	-	-	(63)
5(4)	頸周	(左)	-	-	44
5(5)	骨体中央周	(左)	(43)	-	-
尺骨					
11	尺骨前後径	(左)	-	-	12.5
12	尺骨横径	(左)	-	-	17
大腿骨					
1	最大長	(左)	398	-	-
6	骨体中央矢状径	(右)	31	(25)	-
		(左)	30.5	-	-

表3　（つづき）

7	骨体中央横径	(右)	25	(26)	-
		(左)	25	-	-
8	骨体中央周	(右)	89	(82)	-
		(左)	86	-	-
9	骨体上横径	(右)	29	-	-
		(左)	30	-	-
10	骨体上矢状径	(右)	24	-	-
		(左)	25	-	-
11	最小骨体下矢状径	(右)	28	28	-
		(左)	27	26	-
12	骨体下端横径	(右)	30.5	36	-
		(左)	37	37	-
13	上幅	(左)	88	-	-
14	前頸及び頭長	(左)	65	-	-
22	外顆厚	(左)	-	53	-
23	外顆最大長	(左)	-	54	-
24	内顆最大長	(右)	-	52	-
25	外顆後高	(左)	-	30	-
26	内顆後高	(右)	-	35	-
6／7	骨体中央断面示数	(右)	124.0	96.2	-
		(左)	122.0	-	-
10／9	上骨体断面示数	(右)	82.8	-	-
		(左)	83.3	-	-
膝蓋骨					
1	最大高	(左)	35	-	-
2	最大幅	(左)	37	-	-
3	最大厚	(右)	19	-	-
		(左)	20	-	-
脛骨					
3a	上内関節面幅	(右)	-	30	-
3b	上外関節面幅	(左)	-	26	-
4	脛骨粗面の高さに於ける最大矢状径	(右)	-	51.5	-
8	中央最大径	(右)	29	-	-
		(左)	29.5	-	-
8a	栄養孔位最大径	(右)	(33)	31	-
		(左)	34	-	-
9	中央横径	(右)	21.5	-	-
		(左)	21.5	-	-
9a	栄養孔位横径	(右)	21.5	(19.5)	-
		(左)	22	-	-
10	骨体周	(右)	81	-	-
		(左)	82	-	-
10a	栄養孔位周	(右)	84	-	-
		(左)	80	-	-
10b	骨体最小周	(左)	73	-	-
9a／8a	脛示数	(右)	(65.2)	(62.9)	-
		(左)	64.7	-	-

表 4　主要頭蓋計測値比較（男性）

Martin's No.	計測項目	59-1-1号	菓子野地下式横穴人* (n)	mean	南九州地下式横穴人* (n)	mean
1	頭蓋最大長	177	(3)	182.33	(6)	183.50
8	頭蓋最大幅	144	(3)	136.33	(5)	144.00
17	バジオン・ブレグマ高	138	(3)	135.67	(9)	136.11
8／1	頭蓋長幅示数	81.4	(3)	74.79	(1)	80.56
17／1	頭蓋長高示数	78.0	(3)	74.43	(5)	73.82
17／8	頭蓋幅高示数	95.8	(3)	99.51	(3)	93.42
45	頬骨弓幅	138.5	(1)	140	(4)	139.00
46	中顔幅	95	(3)	102.67	(9)	101.11
47	顔高	116	(2)	115.50	(9)	114.11
48	上顔高	65	(2)	64.00	(13)	64.69
51	眼窩幅Ⅰ（左）	41	(3)	42.67	(11)	43.18
52	眼窩高　（左）	32	(3)	33.00	(16)	32.75
54	鼻　幅	22.5	(3)	27.00	(18)	27.78
55	鼻　高	50.5	(3)	48.33	(16)	50.00
47／45	Kollmann 顔示数	83.8	(1)	84.29	(2)	82.16
47／46	Virchow　顔示数	122.1	(2)	113.32	(6)	113.50
48／45	Kollmann 上顔示数	46.9	(1)	45.71	(3)	47.03
48／46	Virchow　上顔示数	68.4	(2)	62.85	(7)	63.59
52／51	眼窩示数　（左）	78.0	(3)	77.35	(11)	76.70
54／55	鼻示数	44.6	(3)	55.84	(15)	56.14

＊　松下ら(1983)より引用

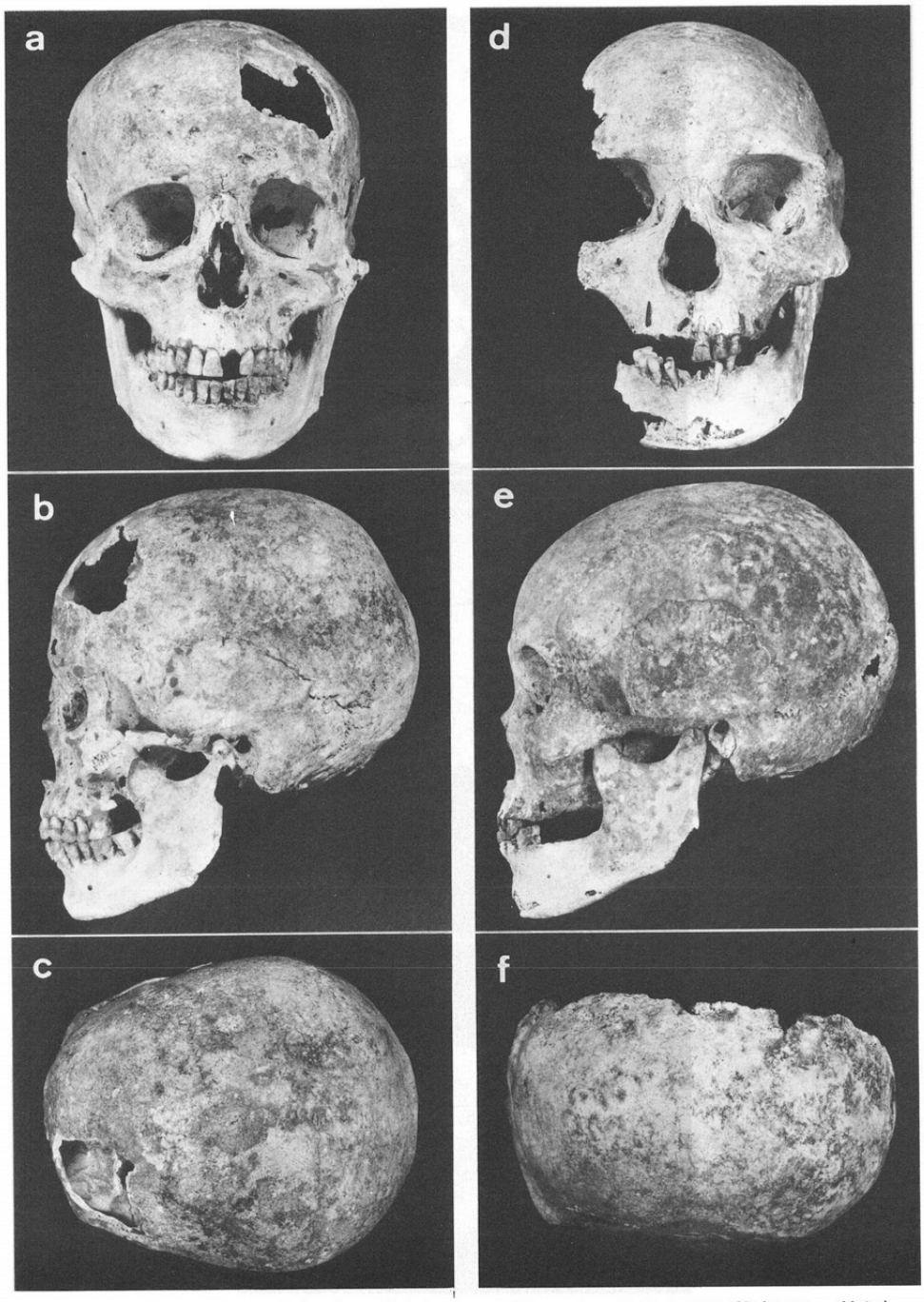
表5　大腿骨・脛骨計測値比較（男性）

Martin's 計測項目 No.		59-1-1 号 右	59-1-1 号 左	55-1-1 号* 右	55-1-1 号* 左	57-5-3 号* 右	57-5-3 号* 左
大腿骨							
1	最大長	-	398	383	-	-	398
6	骨体中央矢状径	31	30.5	29	28	25	25
7	骨体中央横径	25	25	24	24	28	27
8	骨体中央周	89	86	86	84	84	81
9	骨体上横径	29	30	26	27	33	-
10	骨体上矢状径	24	25	24	24	23	-
6／7	骨体中央断面示数	124.0	122.0	120.83	116.67	89.29	92.59
10／9	上骨体断面示数	82.8	83.3	92.31	88.89	69.70	-
脛骨							
8	中央最大径	29	29.5	30	30	31	29
8a	栄養孔位最大径	(33)	34	33	32	35	35
9	中央横径	21.5	21.5	22	22	20	20
9a	栄養孔位横径	21.5	22	23	23	19	21
10	骨体周	81	82	81	80	80	77
10a	栄養孔位周	84	80	91	88	87	89
10b	骨体最小周	-	73	72	72	70	70
9a／8a	脛示数	(65.2)	64.7	69.70	71.88	54.29	60.00

＊　松下ら(1983)より引用

図　　版

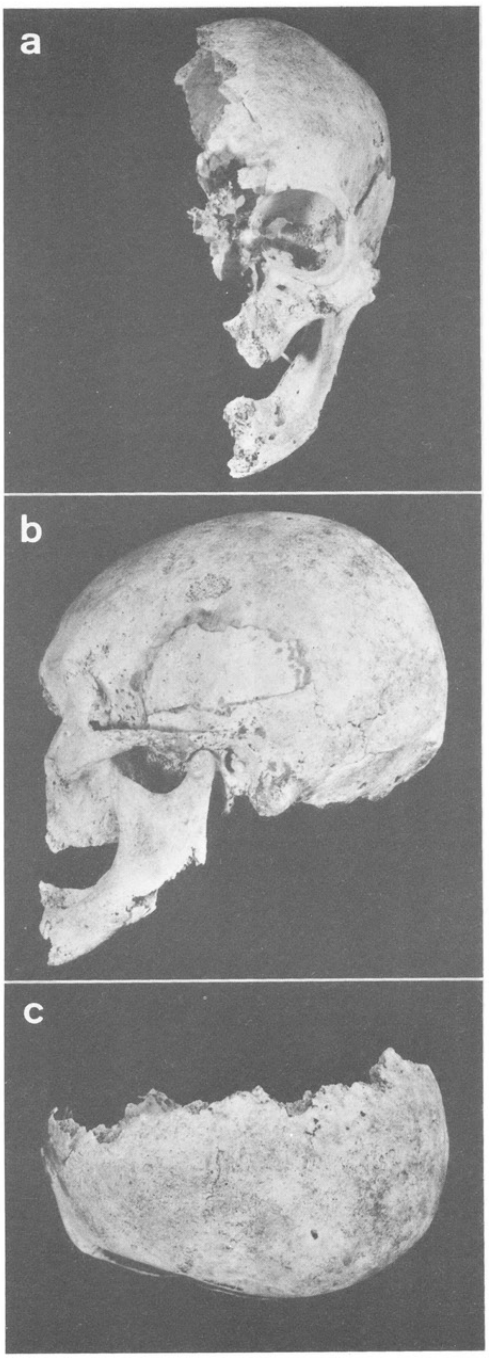
図版1



59－1－1号人骨頭蓋(男性・壮年)
a前面　b側面　c上面

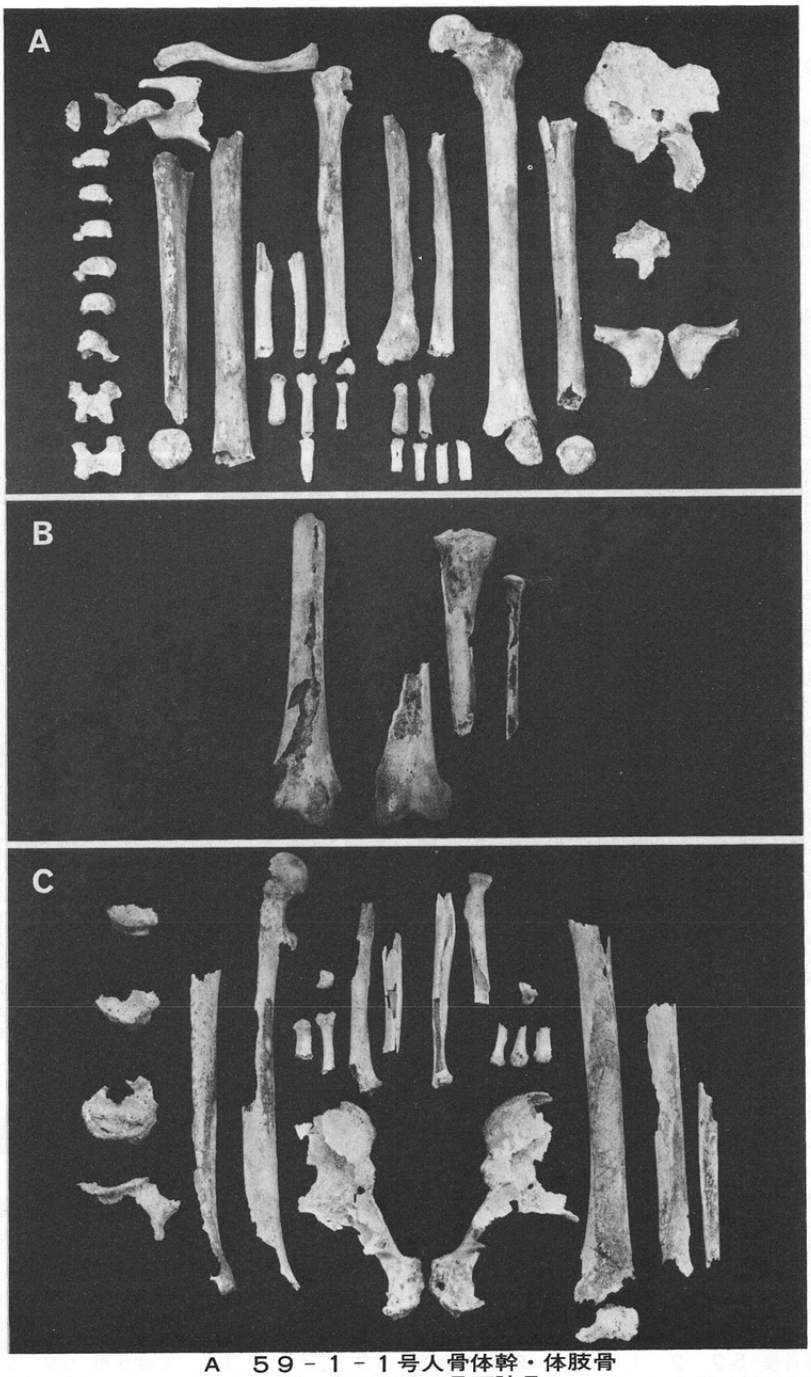
59－1－2号人骨頭蓋(女性・熟年)
d前面　e側面　f上面

図版２



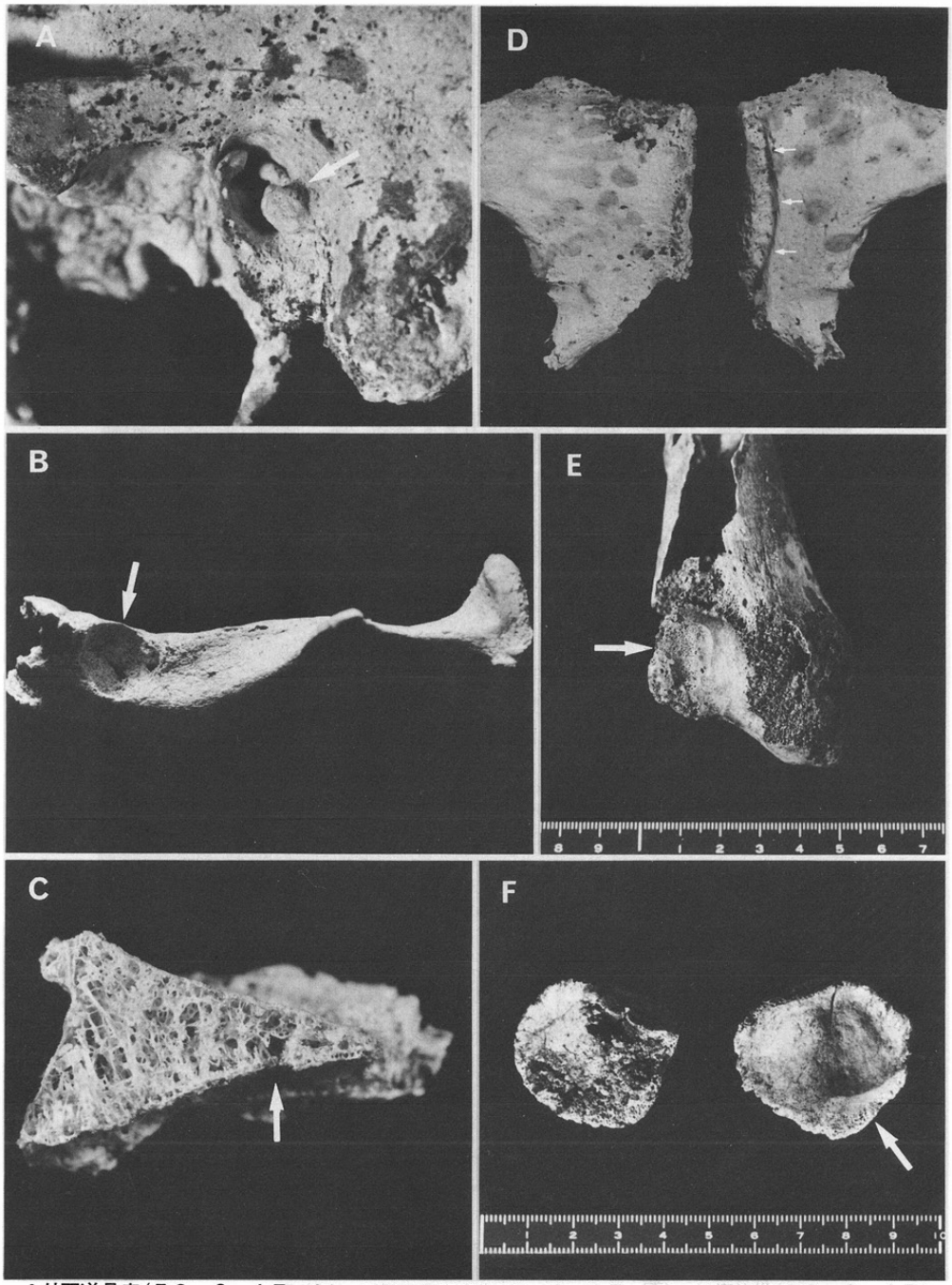
５９－２－１号人骨頭蓋（女性・老年）
ａ前面　ｂ側面　ｃ上面

図版３



A　５９－１－１号人骨体幹・体肢骨
B　５９－１－２号人骨下肢骨
C　５９－２－１号人骨体幹・体肢骨

図版4



A外耳道骨瘤（５９－２－１号，左）　B根尖部病変（５９－２－１号，|6）　C楔状罹（５９－２－１号）
D恥骨結合後縁の溝（５９－２－１号，右）　E関節面の磨耗（５９－１－２号，右大腿骨外側顆）
F関節面の磨耗（５９－１－１号，右膝蓋骨）

付　　録

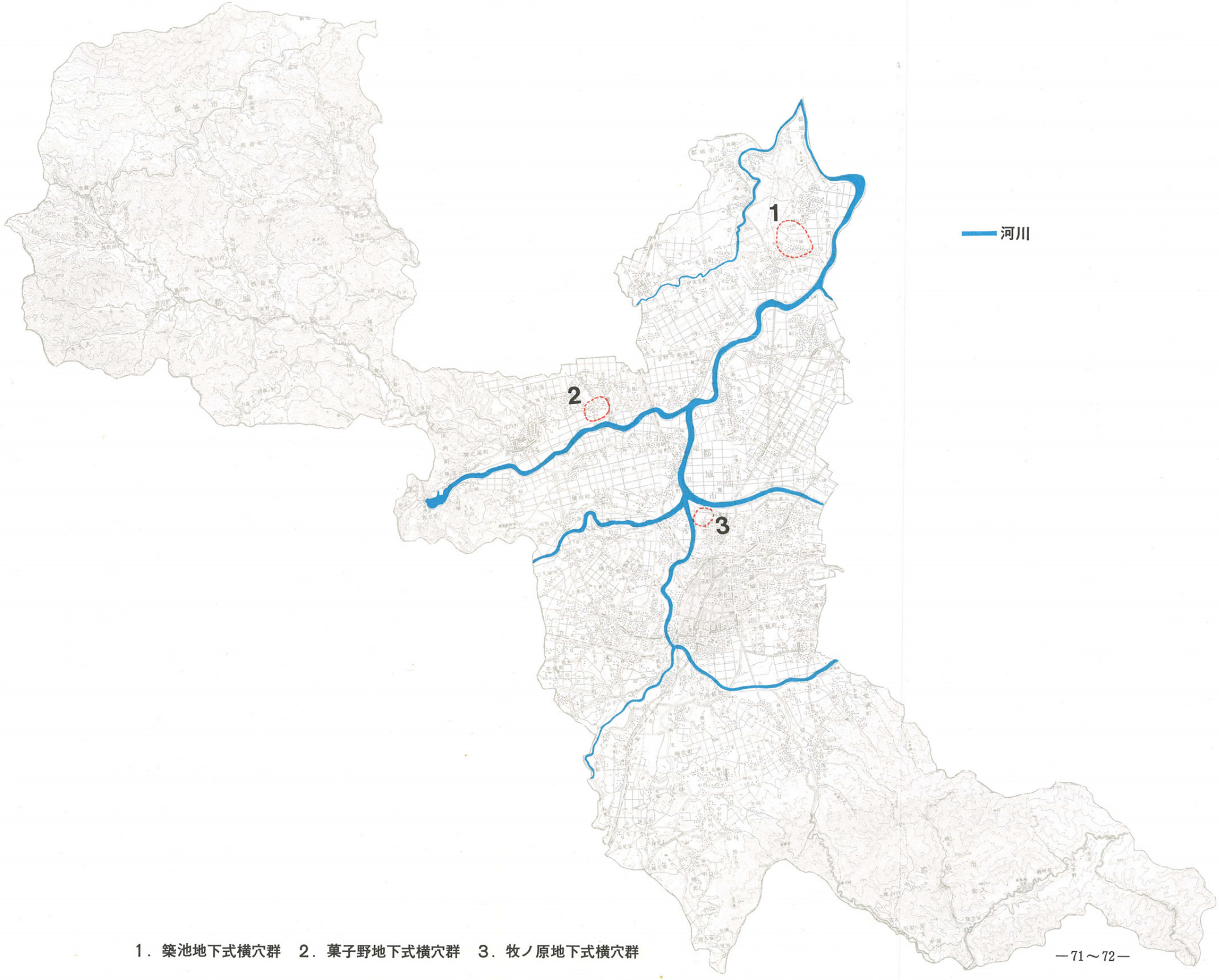
都城市内地下式横穴地名表

番号	地下式横穴名	竪坑形状	羨門閉塞状況	羨道特徴	玄室（形態）	人骨数	副葬品	年代	備考
1	平原 第44—1号	———	消滅	———	ボラ層内 片袖形（逆P字形） ドーム状	1	ナシ	後期	県文書 15号
2	築池 第48—1号				方形状（？）	1	剣-1		
3	〃 第52—1号	未発掘		妻入り	片袖形（逆P字形） 寄棟造り	1	直刀-1 刀子-1（鹿角装） 鉄輪-4ケ		〃 20号
4	〃 第53—1号	未発掘		妻入り	片袖形（逆P字形） 寄棟造り	1	剣-1 直刀-1 鉄鏃-11 以上		〃 21号
5	菓子野 第57—1号		石		両袖形（羽子板状）	3	鉄鏃-5 剣-3	末期	都文書 3号
6	〃 第57—2号								未報告
7	〃 第57—3号								未報告
8	〃 第57—4号		板様施設		ボラ層内 片袖形（逆P字形） ドーム状	1 （小児I期）	ナシ	6c前後	都文書 3号
9	〃 第57—5号		板様施設		片袖形（逆P字形） 天井—平方	3 （男性熟年2 女性〃 1）	貝輪-8 鉄鏃—2	6c前後	〃
10	〃 第59—1号	方形	軽石 （人骨大,7ケ）	平入り	片袖形（逆P字形） ドーム状（？）	2 （男性熟年1 女性〃 1）	剣-1（鹿角装） 短剣-1 鉄鏃-6		
11	〃 第59—2号			平入り	片袖形（逆P字形） ドーム状（？）	1 （女性老年）	ナシ		
12	〃 第59—3号			平入り	両袖形 （突出部アリ）	不明	鉄鏃-3 鉈 -1		
13	築池 第59—1号	未発掘	———	妻入り	片袖形（逆P字形） 倒卵形	不明	剣行剣-1		

都城市牧ノ原地下式横穴群（昭和41年７月発掘調査）

番　号	人　骨	副　葬品	備　考
第１号	1	剣-1，鉄鏃-15	
2	1	剣（蛇行剣）-1，骨鉄-8，鉄鏃-7	
3	1	剣-2，斧頭-1，鉄鏃-5	
4			
5			
6			
7			
8			
9		鉄鏃-3	
10		鉄鏃-1	
11			
12		剣-1，鉄鏃-4，土器（盃）-1	
13			
14			
15	1	鉄鏃-2	
16	1	刀子-1，鉄鏃-2	
17	2	剣-3，刀子-1，鉄鏃-4	
18	1	剣-1，鉄鏃-4	
19			
20	1	刀子-1	
21	1	剣-1，刀子-2	
22	2	鉄鏃-2	前空一高杯１
23	1	刀子-1，鉄鏃-3	
24	1（小児）	鉄鏃-2	
25	2 〔成人 小児〕		
26			

注）本表は、石川恒太郎氏著作の「地下式古墳の研究」をもとに作成。



1．築池地下式横穴群　2．菓子野地下式横穴群　3．牧ノ原地下式横穴群

都城市文化財調査報告書第４集
菓子野地下式横穴
築池地下式横穴
発行年月　昭和６１年３月
発　行　都城市教育委員会
印　刷　㈲　文　昌　堂